
TM ~休載中~

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TM～休載中～

【著者名】

和藤渚

【あらすじ】

とある転校生に振り回される話。
ストックがなくなつたのでしばらく勝手ながら休載させていただきます。楽しみにしていたみなさん本当に申し訳ございません・・・

第1話 転校生に・・・

4月8日 新学期。今日も雲ひとつない晴天。

いつものように学校に行き、いつものように友達とわいわい騒ぎ、いつものように部活にこもるそんな平凡な1日が始まるはずだった・・・

・

「どうしようやばいブレークが～！～ビート～」

と言しながら俺のほうにだんだん突っ込んでくる

「おい！だからって何で俺のほうにくるんだよ～」

と言いつつ逃げ切れず、

「あ～ぶつかる～」

ズドーンという大きい音ともに俺たちは倒れた

まず目に入ったのは大きな胸、さらさらとした長い髪、そしてアイドル並みのかわいい顔

(めっちゃかわいいじゃん！～)

と俺は思った。一見とても清楚でどこか抜けているオトボケキャラのようなイメージだった。そして次の瞬間イメージはもうくも崩れ去った・・・

「痛たたた！！ちょっとどどこ見て歩いてんのよ。ちゃんとどどこって言ったでしょ！～」

と俺に言いがかりをつけてきた。一瞬周りの時間が止まった

「それはこっちのセリフだよ！～どこ見て乗つてんだよ！～おまえどこに田ついてんだよ？それは飾り物か？一度目移植してから学校ここ～！」

と言い返す俺。

「つるさいわね！～だつてしまつがないじゃないじゃないスピード出しきりてブレーキが止まんなかったんだから。それにちゃんとどどいてつて言つたでしょ？だけどどかなかつた。あなたの方こそ耳が悪いんじ

やない。一度病院行つたほうがいいわよ

と負じと反論する彼女

「あんなんどけるか！…どんなトップアスリートでもよけれんわい

！…」

と俺が言つと彼女はすかさず

「あ～そ～うなんだ。運動神経ないんだ。ならどけないわね

「なんだと！…」

「なによ～だつてほんとのことでしょ？」

お互い譲らずだんだん言い争いはヒートアップしていき、いつのまにかやじうまの人だかりができていた。すると突然俺は誰かに頭をぶつけられた

「いつまでけんかお二人さん？はやくしないと始業式始まるぞ」

その声の主はおれの友人の園田だつた。その一言で言い争いは終止符がうたれた

園田とは園田憲太郎。彼はとてもモテる。2ヶ月前のバレンタインデーもチョコレート30個以上もらつたという。いわばこの学校のアイドルなのだ

「けがとかねえ～か？一応保健室行くか」と声をかけて手を伸ばした

結局俺たちは保健室に行き治療してもらつた。けがはしたがかすり傷程度だった

俺は塚瀬智明 龍聖中学3年 特別けんかも強いわけでもないし、女の子にモテるわけでもない、勉強もそこそこ、スポーツもそんなにできるわけでもない。ごくふつうの中学生。
しいて特技をいえば卓球だ。と言つても試合では2・3回戦ですぐ

負けてしまつのが・・・

家族は3人。と兄と姉がいてそして俺だ。両親ははいない。なぜなら両親は僕がまだ小さいころに無くなつた。母は病氣で、父は仕事中の事故でだ。兄と姉は働いていてほとんど家にいない。

結局俺は始業式に遅れてしまつた。体育館で園田と話していた。もちろん話題は校門のこと

「さつき何があつたんだよ」

と聞かれ一部始終を話した

「ハハハそりや災難だつたな。でもあの子かわいくね？転入生かな？あの子ゼッテモテるだらうな？お前にはもつたいないって」と園田が言つと

「知るか。だれがあんなやつ。あいつがモテてようつと俺には関係無い。」

と俺は言つた

「なんのことだよ？なあなあなんの話だよ？」

とみを乗り出すように会話に参加してきたのは俺の友人浜島だつた

「おい！…言つなよ~」

おれは慌てて園田の口をふさごうとしたが

「なんか転入生らしき女の子とケンカしてた

と言つてしまつた

「まじで！…まじで！…智明が？どんな人？」

と興味津々で聞いてくる

「めっちゃかわいかつたぞ智明にはもつたといひほどにな
また浜島に興味をわかせるようなことを言つた

「おい！どの子だよ教えろよ」

と執拗に聞いてくる。

一番厄介な人に知られてしまつた。

浜島は俺の友人の中で一番女に飢えてるのだ。だからこうこう話には必要以上に食いついてくるのだ。そしてかわいい子には田が無い。

始業式があわり俺は新しい教室がある廊下にいた。

「 憲ちゃん、お前何組だった？」

と俺はきいた

「 3組。あのゴリラ男のクラスだよ。おまえは？」

と答える

「ゴリラ男とは体育教師の平屋のことである。身長193cm体重98kg大学までラグビーをやっていたらしい。高校では花園で準優勝したというまさにゴリラである。

「おれは2組。藤岡のクラス。」

「俺も俺もまた一緒だな」

「そりか祐一もか」

祐一とは浜島のことである

浜島と園田と話してると

「聞いたわよ今朝のこと

と突然後ろから声が聞こえた。びっくりして振り向くと幼なじみの

里奈だつた

「おっ里奈どうした？」

と返事すると

「どうしたじやないでしょ！…自転車と派手にぶつかったんでしょ

?ケガとかなかつた?

骨とか折れたりしてない?病院行かなくていい?ただでさえぼーっ

としてんだから気をつけなきや。」

とまるで親のような口調だつた

「つるさいな大丈夫だよ。なんでいつもおおげなんだよ?たく心

配性なんだか。」

とやれやれといつ感じで俺が言った。すると里奈はせりとした様子で「今日はお母さんから買い物頼まれてそれから来るね。今日何が食べたい？」
と言った

「おこおこー今日も里奈ちゃん来るのか？いいな俺も早く帰つこう」としてえ～よ

とひらやましそうに浜島がいつた

「おこ？おまえ何言つてんだよ？」

「もう済ませたじやねえ～のかよ？」

と浜島が言つと

「だからなんのことだよ」

とおれが聞くと

「あ～もうわからんねえ～かな～HだよH。」

と浜島が言つた

「バカかお前は！―するわけねえ～だろそんな！」とーーー

呆れ顔で俺は言つた

「たとえ幼なじみとはいっても男と女だぜ？そんな気持ちになんねえ～のかよ？」

と浜島は言つ

「あ～～なんないね。ガキン時から一緒にいるから。そんな風に見れんわ！たしかにかわいくはなつたけど・・・」
と浜島に反論した

「なんだよー！かわいくなつたけどいやつは気があるんだ？」

と園田にからかわれた

「そんなんじやねえ～よ

言い返すと

「何言つてんだよ？顔赤くなつてんぞ」

とまたからかわれた

そうなのだ両親が死に兄と姉が働き出してから家が隣同士ともあって毎晩里奈が自分の家の夕飯を持って来てくれるようになった。最近では里奈が料理してくれるようになったのだ。小さい頃は兄か姉が帰ってくるまでいてくれた。どっちも帰らない時は一緒に寝たこともあるった。その時は姉が2人いるような気がした。

それぞれ新しいクラスの教室に入り、ホームルームが行われていた。「新しいクラスになつて前と同じクラスの人もいれば初めての人もあります。みなさんお互いに仲良くやつていきましょう。それからあなたたちは受験生です。ちゃんと勉強の方も頑張ってください。それでは転入生を紹介しよう桜井メイカさんだ。」

と担任が紹介すると、教室の中が大フィーバーになった。まるで有名人がきたかのようだ。

かわいいとか、モデルたいとか、胸でけーとか、いきなり僕と付き合つてくださいなどと口くるやつまであらわれた。園田の言う通りだつた。その瞬間からクラスのアイドルにのしあがつたのだ。学校のアイドルにまで上り詰めるのは時間の問題だろう。

そして、メイカは俺の隣の席になつた。

「そういえば、塚瀬。おまえ今日始業式遅れたみたいだね。どうしたんでしよう?」

と担任が訊くと

「桜井さんに自転車ぶつけられて、言いがかりをつけられました。」

と俺は事実を言った。

「そうなんですか?」

とメイカに確認する

「なんのことですか?そんなことしませんよ。それにこの人初めてみますよ」

と答える

「なにしきばつくれてんだよ節穴……ちゃんと移植したのかよ? 移植してこいつていいただろ? 聞いてなかつたのか」

と言つた。

「ひどい私にもしてないの?」

と彼女は泣いてしまつた。そして彼女はこいつを見てニヤけた。

「ウソ泣きですよ……こいつ」

クラスの男子から彼女がそんなことするわけないだろ? と批難され女子には女の子を泣かせるなんて最低と批難された。

「・・・でよ俺学級委員になつてしまつてほんと最悪な一日だつた。なんで俺のときとみんなときで態度違つんだよ。つつか飯まだ?」
と家で里奈にグチついていた。

「ちよつと待つてもうすぐできるから。ああのこいつわね

と里奈が言つとチャイムが鳴つた

こんな時間に誰だらうつて思いながら出でみると

「こんばんは」

と一番嫌なやつだった。

第2話 パーティーで・・・

「げつ！…なんでおまえがここにいるんだよ？」

「げつ！…ってなによげつて」

「こんなとこに何しに来た？節穴女」

「呼ばれたのよ」

「誰に？」

「誰でもいいでしょ？別にあなたに関係ないし」

「おおありだよ！…ここは俺んちだ」

「そんじゃ入るわよ」

と入ろうとする彼女を外に出した

「なにすんのよ」

「勝手に人の家にはいろいろとすんな」と言い争っていると里奈が出てきた。

「あらメイカどうしたの？」

とメイカに問いかける

「どうしたのじゃないよ里奈ちゃんがよんでもんでしょう？」

どうやらメイカと里奈は知り合いらしい。まず俺は

「すいません、2人の間柄は？」

「いとこなの」

「いとこ」

と2人同時に言う

「そうですか。それはそれとしてどうゆうことだよ里奈？」

と俺が聞く。里奈がしばらく考え込んだ。そして思い出したように

「そうだ！…思い出した。この間メイカの歓迎パーティーをしよう

つて言つてたんだ」

「でなぜにうち？」

とまた質問する。

「うちには今晚家族でご飯食べに行つて、いま私しかいないの。家の力ギいえに置いてきちゃつて入れないの。それでメイカの家は引っ越したばかりだからまだダンボール箱ばっかりで入れる状態じやないのよ。だからお願ひ」

「いつ家族はかえるんだ？」

「たぶん11時には戻るとおもつ」

「わかつた。わかつた。はいれよ。勘違いすんなよ節穴女。里奈に頼まれたからするんだからな」

ということでおもつことになつた

俺がご飯をつぐことになつた今日のメニューはカレーなのだがパティーでカレーだけじゃあんまりだとまた里奈は台所に戻つていつた。すると

ピンポンとまた家のチャイムがなつた

「今度は誰だよ？」と出でみると

「ちわ～っす」

「こんばんは」

それは園田と浜島だつた。

「何しにきたんだよ？」

「なにしにつてお前英語の教科書忘れてたからとビデオにきたんだ」（まづい！！今ここで桜井がいるつてバレたら轟ちゃんはともかく祐一になにいわれるかわからない）

「ありがとよ」

「おう。じゃあな！！」

と二人が出て行く。ほつとするのもつかの間。

「あ～靴が3つ…これは智明、これは里奈ちゃん、これは…。と浜島が余計なことに気づいてしまつた。

「姉貴のだよ」

と苦笑紛れに言い訳すると

「それはない美穂さんはもうちょっと大きいもん」

(するどい！…さすが祐一。じゃなくて嘘を考えなくては)
と必死に考えるが、でてこない

「それは、その……」

「あやしい・…入るうぜ、憲ちゃん」

「待てつてかつて人んちはいんな」

「そうだよ。祐一やめとけって」

とノリ気ではない園田を連れて強引に家に入つていった

「わりいーな智。すぐ帰るから」

「こんにちは里奈ちゃん。それにつちのクラスに来た転校生ジャン」

「あらどうしたの浜島くんたち」

「どうも」

「実は智が忘れ物してね届けに来たんだよ」

と園田が言つと

「『めんねわざわざ。せつかくだから食べていかない』

と里奈がお礼を言つ。

「おい！里奈？」

「いいじやない。多いほうが楽しいし、それに親しい友人がいれば
メイカも安心でしょ？」

と里奈が説得した。

「そうですよね～？多いほうが楽しいですね～？つと前の前に」
浜島は俺を玄関につれだし

「おい！これははどういうことだよ？きつちり説明してもらおうか」とものすごい形相で詰め寄つてくる。

「これはいろいろと事情があつて成り行きといつか・…」

口ごもる俺。

「だいたいなお前だけずりいーぞ。里奈ちゃんという人がいながら。

「何勘違いしてんだよ！…だれがあんな節穴女。猫かぶるようなやつだろくなやつじやねえ～」

「こうことで2人増えて5人で食べることになった

俺は、「飯を入れてルーをいれてみんなにだした。里奈は

「はいよ」

「なんかお前がつぐのって違和感あるな

「言てる。いつも里奈ちゃんにやつてもうつてるもんな。

「つるせー」

「そりなんだ」

と積極的に話に入ろうとしているメイカ。

「小さい頃から里奈ちゃんにべつたりでよ」

「そうそうしかも泣き虫でよ。」

「いじめられたり、転んだりするたびに泣いてよ。」

「一番困ったのが鬼ごっこかくれんぼとかの鬼に何度もなると
数えているうちにだんだん泣き出すんだよ。そのたびに里奈ちゃん
が慰めたもんだ」

「まあ無理もネエ。両親は小さいときに亡くしてて、兄弟はい
るけど年は近くても10歳離れてる上にほとんど働きづめで家に帰
つてこなかつたから事実上里奈が親代わりみたいなどこあつたから
な」

(こいつだつて苦労してるんだな・・・)

と園田たちは俺の小さい頃の話をしていた。その間にたくさんの料
理を持つてしてきた。

「何しんみりしてんだよ食べるぞ?」

「いただきま~す」

みんなじつにおいしそうな顔して食べてて、一人様子がおかしい

人がいた。それはメイカだ。

動きが止まりしだいに顔が険しくなってきた。そして耐え切れず

「から――――――!――!

「こういうこともあるつかと思つてな通常の5倍の辛さの唐辛子を
大量に入れたんだよ」

「ただ単にお兄さんとお姉さんが辛いのが好きだけでしょ？普通の唐辛子じゃ物足りないから。いつもそれ使ってんの。ごめんね。

智明ちゃんとあやまりなさい」

「いやだね。なんであいつなんかにあたまさげなきゃいけねえくんだよ」

「#\$/<>-* & (やつてくれたわね)」

「どうやら辛さでどれつが回ってないようだ

「ざまあみる節穴女、俺の恨み思い知ったか」

おれはしてやつたりだつた。

「へえ～ そんなに辛いの好きなんだ～」

と怒り心頭の様子であつた。

「そんなに好きなら、そんなに好きなら全部くれてやるわよ」と曰」と俺の口に入れられた

「「ホツホツホ。辛れ——」

のちに悶絶した。

「いい氣味、まさに自業自得ね」

「ちょっと2人とも」

「やめとけつて」

と止めに入る里奈と園田。

「やつたなこのやううー！」

とおれはメイカのサラダにこいつそり大量の砂糖をいた
食べて悶絶するメイカ。

この後もから揚げに大量の酢をかけたり、ジュースに大量の塩をい
れられたりした

「もういい加減にしなさい一人とも！—」

それにしごれを切らした里奈であつた。しばらくして

「もう一杯い」「

「おりーーしつかりしろ翔太。家ついたぞ」

となにやら男と女の声が聞こえた。どうやら兄と姉が帰還のよう

だ。

時計を見ると10時半を回っていた。

そして居間に2人が入ってきた

「おー！美少女が一人。姉ちゃんいつの間に制服パブにきたの？」

「ばかかお前はここは家だ」

頭をたたいていった

「巨乳美少女。うわ～天国だ～」

と兄は2人に飛びついた

「きや～ちょっと。もうまた」

「やめてくださいよ～！」

と里奈とメイカの胸をもみ始めた。

「ねえ君達何カツプ？」

と兄は聞いてきた

戸惑う2人。

見かねた姉が肘鉄を食らわせて
「何中学生をくどいてんだよ？」

兄はのびた。

「ごめんよ、いつもいつも。、里奈ちゃん、それに・・・」

「初めてまして桜井メイカです」

「里奈のいとこで俺のクラスメートだよ」

「3人の男が2人の女を奪い合つ。まさに修羅場だね～」

「違うつてそんなんじゃないからー！」

「まあがんばんな。」

「だから違うつて。」

とからかつて部屋に戻つていった。

そしてパーティーは終わり里奈は家に戻り、メイカを家に送る」と
になつた

「なんであんたに送られなきゃいけないわけ？」「今まででいい」と
と嫌がるメイカ。

「しょうがねえ～だろ憲ちゃんたちとは反対方向だし、女一人で夜

道を歩くのは危ないからって無理やり姉貴にいかされたんだから」と逆ギレした。

「なんかすまねえ、な俺のバカ兄貴が。ならここまで。気をつけて帰れよ」

「いいのよ。酔っ払いのあつかいなれてるから」

と踏み切りのところで分かれた。メイカが踏み切りでこけて立ち上がりでいた。

すると遮断機がおりて電車が来てしまった。まわりにはだれもいない。

非常ボタンも間に合わない。おれはとっさに踏み切りの中に飛び込んだ。メイカを抱きかかえ脱出した。

「危なかつたな。大丈夫か。見せてみ？」

自転車でぶつかつたときと反対側をけがしていた。

「立てるか？」

「ええ大丈夫よ。あなたが心配するほどやわじやないわよ」と立ち上ったが歩けそなになさそうだ。

「ほれ」

と俺はしゃがんでメイカをおぶろうとしたがもちろん断られた。
「いやよ。なんであんたにおぶつてもらわないといけないのよ」「ばかかー！歩けねえのにそんなこと言つてる場合かよ」「いやだつていつてるでしょーーー！」

「桜井ーー！」

メイカはしぶしぶ納得した。そして家まで送りあいにく両親が留守だつたのでケガしたとこを消毒して帰つた

「メイカ？新しい学校やつていけそう？」

「うん。楽しくやつていけそう。」

第3話 引越しの整理で・・・

そしてその週末

ほんの小さな出来事に愛は傷ついて
とこゝの携帯電話の音で田中が覚めた

「もしもし」

「あーもしもし智明お母さんもいらっしゃるみたいとこがあるんだけど・・・」

声の主は里奈だった

そこには園田と浜島もいた

「でなんで俺たちが桜井んちの整理をしなきゃいけねえんだよー！
家族のやつはどうした？ それになんである2人もいんだよ」

「じょうがないでしょ？両親が出張なんだから。ほら文句言わずに
働く」

と里奈がなだめた

「たく引っ越してそいつ出張かよ。どんな会社に勤めてんだよお
前の親は？」

「メイカちゃんの手伝いなんてなんて幸せなことだ。なあそいつ思わ
ない？ そう思うだろ？」

としきりに浜島が同意を求めてきた

「あー！ もうひるせーーー！」

「なにかあればいつでもとんできますよお嬢さん？」

「なにくどいてんだよ、憲ちゃん」

「お姉ちゃん？ 僕はどうすればいいの？」

「あなたはとりあえず自分のものを整理して」

「あー里奈お姉ちゃん」

「久しづりね文也。」

「これ弟。いら文也あこさつしなむこ」

「ものあつかいするな乳だけ女。どいつも弟の文也です。よみじく

「誰が乳だけ女だつてクソがきが」

とメイカが文也の頭をグリグリした。

それに俺はみとれていた。

「智明？ 智明」

「あーなに？」

「なにぼーつとこいんの？」

「あーごめん」

「やるよ」

と里奈が俺を正気に戻した。

「園田君、お皿やお茶碗はあの棚にいれでグラスはあっちね」

「メイカちゃんこれは？」

と浜島が聞く

「それはそつち。」

とメイカが答える

「智明？ ちょっとこいおねえて」

ともくもくとみんな整理打ち込んでいた。そしてひと段落がつき食を食べることにした。

「今日、弁当作ってきたのみんなで食べよつむ」

「つまむ、いただきます」

「つまむ……つまむ……やつぱ里奈ちゃんの料理つまむわ」とおこしそうに食べてる。

「私の好きな「ロシケ」

とメイカが食べよつとするとき文也が奪った。

「なにすんのよ?」

「だつて僕も好きなんだもん」

「これも貰い」

とまた文也に捕られてしまった。そのせいで

「あんた食べなくても働けるでしょ? 皿の中身よこしなむこよ

と俺はメイカにすべて取られた

「おい！なにいつてんだよ日頃の行いが悪いから弟になめられんだよ、節穴女」

「その通りなんですよ、お兄さん、この人ねひどいんですよ？」
と文也からは小さい頃電池を投げられて頭に全治2週間のケガをさせられたことや靴に画鋲をいれられたこと、捨てられたカーペットをまかれて川に投げられたことなどを話してくれた。

「すげえ、俺想像できる」

「私も・・・メイカらしいわ」

俺と里奈が行つた

「おれは想像つかないな」

「俺も、メイカちゃんがそういうことするよ、うつに思えない」

園田と浜島はそう言った。

「みなさん、このルックス、このスタイルに騙されないでくださいね」

と文也が警告した。

「それってどういう意味よ？」

「言つた通りだよ」

「言わせておけばくそがきが」

また文也の頭をグリグリしたところで再び作業が始まった。

みんなテキパキと仕事をこなし、作業が進んでいく。作業も終わりかけた時

俺は一つのダンボールに手を伸ばした。

すると気づいたメイカがすごい顔つきで走ってきた

「これにさわっちゃダメ〜〜〜！」

そしてつまずいてダンボールは倒れ、彼女は転んだ。
中から彼女のと思われる下着が大量にでてきた。

「イタタタタ・・・・」

「D・cupsか。やっぱ大きいと思つたよ」

と園田が言った

「ちょっとみないでよ……エッチ……変態……人の下着をあさるなんて最低！！」

と俺につつかかってきた

「なんで俺がいわれなきや いけねえんだよ。だいたいお前がこけたのが悪いんだろ？」

「もとはといえばあんたがそのダンボールを開けようとするからでしょ？」

「下着が入ってるって知らねえもん。ダンボールに書ことけよ」「急な引越しだったから時間無かつたのよ」

と言い争いをしてると

浜島の様子がおかしいことに気がついた

「祐一、どうした？ おい？」

どうやらD・CUPという言葉がクリンヒットしたらしく

「D・CUP メイカちゃんはD・CUP

とはしゃいで鼻血をだして倒れた。

「おー！ 祐一大丈夫か？ おーいしつかりしろ～」
とビンタするが反応なし

「だめだ・・・完全にいつてる」

「たくつ祐一のやつ」

浜島が失神や下着のダンボールが倒れるハプニングはあつたが無事

？に整理が終わった

「ふう～終わつた」

とみんながくつろいでいると

「みんなありがとね。お礼に私が料理作つてあげる

「お姉ちゃん、そ・・・」

とメイカは文也の口をふさいだ

「なんだよ？」

「いやなんでもない」

とメイカは文也を連れてキッチンに入つていった

「余計なこといったらどうなるかわかってるよね？」

不気味な笑顔で文也に聞いた。

「はい」

「なら戻つてみんなと一緒に待つてて」「文也は凍りついた。

「ふんふん」

と鼻歌歌いながら作つている。

その頃部屋では俺たちが話していた

「メイカちゃんどんなどんな料理なのかな?」

「文也君お姉ちゃんつていつもどんな料理作つてんの?」

「よくカレーライスとかコロッケとか作つてくれます」

「うまい?」

「すげーおいしいですよ」

(僕なんでこんな嘘ついてんだろ?お姉ちゃんの料理・・・)

文也は首を振つて

(あ~もう思い出すのはやめておひづ)

1時間後料理ができたみたいだ

今日のメニューはカレーライスのようだ。

とてもいい匂いがする。

浜島も目も覚め、みんな居間に移動して夕食の準備をした。
見た目もかなりおいしそうだ。

「いただきまーす」

とみんな一口。

「うつ」

みんなの顔色がだんだん悪くなつていぐ。

「おい!どうやつたらこんなまずいもん作れんだ?」

と俺はきいた

「なわけ・・・あるか」

とがつかりするメイカ

「まあでも食えないことはないよな?みんな」と俺はみんなに同意を求めた。

「うん、やうだね」

「つまくはないけど食べられない」とせなーぞ

「やうか?何強がりじつてんだよこんなもん食いもんじや」

里奈が慌てて口をふさいだ。そしてみんな完食した。

「すいません、実はお姉ちゃん料理できないんですね。なのにみなさん・・・」

と文也は泣き出しちゃった。

「向き不向きがあるから」

「もつと練習しろよな」

「メイカちゃんは料理できなくてもかわいいからOK

「今度はつまくつくれよな。たく死ぬかと思つたぜ」

「やしたひどいやつでご飯食べてんだ?」

と浜島がきく

「主に僕が

「まじで!!--」

みんな驚いた。

「弟に飯を食わせてもらひてる姉。かつこわる」

とおれがいふと

「なにいってんのよ?あんただつて里奈けやんにつけつつでもらつてるじゃない」

「俺は自分で作るつと思えば作れる」

「ほんと?里奈ちゃん」

「なにいってんのよ、包トモももつたことないくせに」と口ゲンカしてこると

「おまたせしました」

とまたカレーがでてきた

「お姉ちゃんの手直しききました。あとサラダとかき揚げを作つてみました」

みんな手を付けた

「おいしー」

「うめえ～」

「うまい」

「本当に前から姉弟なのか。全然違うぞ。まじでうめー」

「つるさいわね。そうに決まってるでしょ」

こひしてマイカの家の整理は終わった。外にはもう灯りが点いていた。

その帰り道

「そういうばさ智明？なんでマイカと文也のケンカをじつとみてた

の？ケンカの相手は自分しかいないとおもって嫉妬したとか？」

「嫉妬？何バカいってんだよ！だれがあんなやつ。でも嫉妬かなや

つぱ」

「文也に？」

「別の意味でな。俺さ兄弟いるけどさ一番近いお兄ちゃんでも10歳違いだからケンカにもなんねーんだよな。ケンカしてる桜井と文

也君見てたら羨ましいなつて思つてな」

俺はこの日初めて年が若い兄弟が欲しいと思った

第4話 体力測定で・・・

地獄の手伝いから5日後この日は体力測定である。

「男子2組、女子はここで着替えてください」と担任が言つと

「着替え覗かないでよね」

とメイカがいつてきた

「何言つてんだよ、誰が覗くか！…ばかじやねえーの？」

「あら？下着の入ったダンボールを開けようとしたのはどこの誰かな？」

「あれは知らなかつただよ、俺は無罪だ」

「こらそこー！話さない

と担任に指摘された。

「先生、塙瀬君にお前の裸見てみた言つていわれました」

「あほか！！言つかそなこと」

（またでたらめ言いやがつてぜつてえーぶつ殺すこの女）^{アマ}

確かにお前この間手伝つたときメイカちゃんの下着見て興奮して倒れたよな？」

「ばか！…それはお前だろ？」

と浜島がはやし立てる。

「違うんだみんな

「塙瀬君最低」

「この変態ヤロー」

男女から批難ゴーゴー。

「うんうん思春期ですね～いい事いい事。でもそういうのは程々にお願いしますね。はいはいみんな静かにしてください。」

「だから言つてませんって」と俺は否定した。

そして体力測定の時間

「そりいえば塙瀬君つて運動神経ひだつたよね

「ちげーよー！ちゃんと人並みにあるわ」

「私の自転車によけられずにオドオドしてぶつかつたくせに」

「バカか！お前は。あんなもん誰も避けられるわけねえんだろ」

「あらどうかしらね？ならいいわよ勝負しましようよ。それであなたが勝てば今後一切運動神経ないつて言わないから。もし私が勝つたら私のこいつ」と聞くこと

「なんでそうなるんだよ。」

「逃げる気？いいよそれでも。やしたら一生私の言ひ事を聞くこと

になるけど

俺は想像してみた

「塙瀬君、ジューク買つてきて」

「え、なんで？」

「買つてきて」

「はい」

そしてジュークを買つてくると

「おそ～～～い！！！」

とどび蹴りを食ひつつ

「塙瀬君、ちよつと来てくんない？」

「なんでだよ」

「いいから来なさいーーー！」

「はい」

来ると

「ちよつと買いすぎたんだよねだから持つて全部」と大量の荷物を持たされる

下手したら

「塙瀬君ご飯食べにつれつてつてよ」

「いやだ」

「つれつてつて

「はい」

ファミレスに行き

「7800円です」

「全部連れもちでお願いします」

俺はぞつとした

（そうだ！！これは桜井の奴隸生活がかかつてゐるだ。負けるわけにはいかねえんだ）

「わかつたよやつてやろうじやねえーか」

俺は勝負を受けてたつた。

「ハハハそれでお前勝負うけたのかよ？お前らしいな」

「うるせーこつちはな人生がかかつてんだ」

「人生つて・・・大げさな智明は」

「大げさでもなんでもねえよあんな鬼乳女」

そして勝負の時がやつてきた。まずはハンドボール投げからだ。
まず俺からだ

（あいつの奴隸生活なんかごめんだ〜〜〜！〜！）
と投げた。

「37Mです

「すげー」

「かたつえーんだな？智明」

（まだまだね）

（よし！まず1勝）

「なあ智明？女の子に本気出して大人げねーぞ」

「そうか？祐一」

メイカの番になつた

（まあ37Mこすことはねえんだろ？）

メイカが投げた

ぐんぐんぐん伸びて行く智明の記録をあつさりと抜いてなお伸

びて行く記録は・・・

(うそだろ? 抜かれたよーーー)

「48Mです」

「すうじい桜井さん」

「男子の記録抜いちやつたよ」

と女子が盛り上がる

俺のところに来て

「まず私の1勝ね」

とつぶやいた

「なにいつてんだ? お前油断してただけだこれからだよ。まあ結果は見えてるし、少しばかり華をもたせたほうがいいかな? なんて」

「そうよね? 結果は見えてるもんね」

不気味な笑顔でいった。その中には「威圧感」がひしひしと感じてきた。

次は俺の得意な50M走だ

「憲ちゃん? タイムどうだった?」

「6秒7」

「すげー 6秒台ジャン」

「祐一はどうなんだよ?」

「聞くくなよ俺遅いのしつてるくせに・・・10秒2だよ」

俺の番

(さっきは油断して負けたけど今度は俺これ得意だし勝てるだらつと走った。

俺がダントツで1位だったタイムは・・・

「5秒8です」

「さすが智明だな」

「たしかに足だけは速かったもんね。後はメイカちゃんだね

メイカの番

(女子が5秒台はまずないだろ? でもあいつなら・・・)
メイカもダントツで1位だったタイムは・・・

計っている人は驚いていた

「よつ4秒6です」

（なに――――――――4秒台？ありえねえ～もつきのとこにあいつホントに人間か？）

反復横どび智明 5 6

マイカ102

持久走 智明 6 分2秒

マイカ 5分13秒

結局俺はマイカに完敗し俺はマイカの奴隸生活が確定した体力測定後の着替えの時間マイカがさっそく

「塚瀬？実はさつきナイフ持った人が教室に」

「みんなは？」

「まだ帰ってきてないの。だから今のうちに」

「先生呼べばいいじゃん」

と言つと

「それじゃおそいのもしかしたら誰か来て人質にされるかもしれないのよ」

「だからなんで俺がいかなきやいけねえんだよ」

「勝負に負けたでしょ？私の言つ事きくんじやなかつたつけ？ほら

とつとと行く！」

と背中を押され教室に入れられた。すぐにドアが閉まった

「きやーーー！」

「えつち

「見ないで」

「変態」

「これは違うんだ、あの～これは・・・」

女子全員「問答無用」

「 もちー 」

女子にボロボロ泣かれた。

その頃メイカは

「 のどが沸いた水飲んで」

第5話 「ホールデンウイークに・・・

「なんで2人だけでこんなところにこないといけないわけ?」

「俺だつていやなんだよ、なんでお前なんだよ? 祐一の方がまだよかつたわ」

とメイカと言い争いをしていた。俺たちは今クライスランドに来て
いる。なぜかというと

三日前 曜休み、3・2の教室で

やつたーーーみんなクライスランドのチケットが手に入ったぞ」と浜島が言った。

「でかしたぞ祐一」

メイカ「どこそこ?」

とメイカが首をかしげた。

「2週間前にできたばかりで今一番入手困難といわれるチケットな
の」

と説明する里奈

「へゝそりゃんだ」

と関心するメイカ

「それで、何枚手に入ったんだ?」

と園田が訊ねる。

浜島「2枚」

園田「2枚か」

里奈「2枚ね」

俺「2枚な」

メイカ「ふうん2枚ね」

「え? 2枚! ! !」

みんな驚いた。

「ふざけんなよみんないけねーじゃねーかよ」

「こらー! わがままいわないの智明」

里奈に叱られた。

「俺さちよつと法事でいけないんだよ。だからみんなでどつにかしていいってくんない?」

「やさしいのね浜島君、大好き」

とマイカが猫なで声でいうと

「そう?みんな聞いた、マイカちゃんが大好きだつて?」

はしゃぐ浜島。

「あいつ絶対いつか女に騙されるぞ、あれじゃ」

園田がそう言うと俺と里奈は納得したと同時に俺は（あいつ今まで何人の男を騙してきたんだろ?）

と思つて怖くなつた。

そして俺たち4人はまずじゃんけんで決めることになり俺は抜けるはずだつたがみんなの意向で強制的に俺もすることになつた。

「じゃんけんぽん」

マイカ パー 他グー

1人決まつた。

残るイスはあと一つじゃんけんの行方は・・・

（どうでもいいや、まあ勝つたらラッキーということ）

（絶対行きたい、だつて入手困難のチケットよ、またいつ手に入るかわからないのよ）

（「冗談じゃねえ、あいつなんかと行きたくねえ、よー、すぐ負けよう」）

「じゃんけんぽん」

俺 グー 園田 グー 里奈 チョキ

（よつしゃー！あと1勝）

（うそ、まじで勝つちまたよ）

（ああ負けちゃつた、いつになるかわかんないけど今までおあずけね）

残るは2人 園田憲太郎 14歳 6月21生まれ O型龍聖中学

校NO1のイケメン

そして俺 塚瀬智明 14歳 7月21日生まれ A型「J」へ普通の中学生

(「ひなつたら絶対勝つてやる)

(負けてやる、ゼッテー負けてやる)

「じゅんけんぽん」

俺 チヨキ 園田 パー

(やべ～勝つちまたよつ)

俺はがつかりした。

(あ～あ負けちやつた)

「なあ里奈本当はこきたいんだろ? これ譲るよ」

「いいの? ありがとうでも私この日おそれくお父さんが入院するから無理なの」

(なに見え透いた嘘言つてんだよ)

「そうですか?」

「憲ちゃんお願ひだよもうひとつへんない?..」

「俺は知らん。自分でなんとかしろ」

「けんちやん?」

「ビ」「ごく?

と俺が聞くと

「あれ」

と指をさした所は

「きやーきやーきやー」

(まじかよ!...おれ...)

「うわ~死ぬ~

「ハハハ、たのし~」

「はーはーはー、楽しかった。情けないわよ、これくらいで怖がつて」

「ゼーゼーゼー。ふざけんな、怖いもんは怖いんだよ

「お前怖いものとかねーのかよ」

「そんなのあるわけないでしょ？」

ときつぱり言づメイカ。

「次どこいく？」

とメイカが聞いてきた

「あれなんかどうだ」

と俺が指をさすとメイカが身震いをした

「お前もしかして怖いのか？」

「何言つてのよ怖いわけないでしょ」

と言づメイカ。

「ちよつと先に行かないでよ。」

さつきまでの勢いはどじくやら怖がるメイカ。

「やつぱにえーのか」

とからかうと

「何言つてのよー」んなん全然怖くないわよ」

と強がつた。すると横から落ち武者のよつなお化けがでてきて矢を放つた。

「きやー！ー！」

と俺の袖を掴んで俺を見た。彼女は涙目だった。

（やべーかわいいじやん。）

と一瞬その顔に見とれた。そして俺たちはお化け屋敷から出た。

「ハハハなんだよあんなんで怖がつてなさけねえーぞ。」

「別に怖がつてなんかないわよー！」

「じゃーなんで俺の袖を掴んだのかな？」

「それは・・・」

と口づくるメイカ

「認めろって」

「だから怖くなかったって言つてるでしょ？」

「あ～そうですか。たく素直じゃね～んだから」「それってどういう意味よ？私はいつも素直ですよ」

「ど～がだよ！…それで今度はど～こ～く？」

「あれなんだらう～」

と俺が指差したのは -40 の体験部屋だった。そこは簡単な迷路ですべて氷できていた。また途中においてある氷の中にはぬいぐるみやカードや果物が入っていて、それを当てたら景品をもらえると言つものだつた。

「行つてみよ～」

と強引にメイカに手を引かれて入つた

「寒つ～！」

「だれよ！…こんなとこ入るひつて言つたの」

「おまえだろ～…」

「もとはといえбаあんたが見つけたんでしょ～？」

「なにいつてんだよ強引に連れて行つたのはお前だろ～？」

「なによ」

「なんだよ」

といつものようにケンカしてると従業員に

「お～いそこの兄ちゃんと姉ちゃん夫婦ゲンカもいいけど後ろ聞えてるんだけど」

注意された。

「すいません」

と俺たちは無事にホールした。

そして

「お腹すいたから何か食べに行こうよ～」

とメイカが言った時時計の針は1時を指していた。

「そうだな」

(よじとりあえずは持つたな)

「そうだ～私、弁当作ってきたんだっけ？」

「それ・・・だれが作ったんだ？」

と聞くと

「私は決まつてんじやない。」

俺たちはなにもやつていな」「ヒーローシャーの観客席で食べる」とした

「ほり、じゅわ」

と皿によやうメイカ

(「こいつの料理見た目はこいんだけど）

(やつよ、あれからたくさん練習したんだから、まずははずがない)

俺は覚悟を決めて口に運んだ

「まづい・・・俺を殺す氣か」

悶絶した。

「そんなはず」

とメイカも口に運ぶ

「うつ」

悶絶した。そして申し訳なやうなさびしげな顔をしていた。

それに見かねた俺は

「わかつたよ。全部食べてやるよ、がんばって作ったんだろ?」「

と言つとメイカはとても嬉しそうな顔をした。

(やつぱまじでかわいい)

と胸がキュンとした。

「私、実はこいつって男の子と遊ぶの初めてなんだ」

「そりなんだ、なんか意外。」

「私いつも学校ではあんな風にしてるでしょ?だからみんな男を何人も騙してると思われてて」

(やつぱ、みんなああこいつ」と言しながらちゃんと見てんだな)

「それで?人がどう思おうとそれはお前に関係ないだろ?」

「でも」

「いいじょんお前はお前だら?つうかなにこつてんだよ?お前らし

くねー頭おかしくなつたんじゃねえのか?」「ごめんななんかおかしなこといつちやつたね

(なんだ?こいつ)

(なに言つてんだらう私……)

そして食べ終わつてまたいろいろひまわりいつの間にか陽は傾きかけていた

「そだみんなにお土産買わないと殺されつちまつ。」
一人でお土産売り場に向かつた。

「あいつはこれ

「里奈はこのTシャツ」

「憲ちゃんはこの香水かな?」

と選んでいると

「これ買つて?」

とせがんできた

「まだだ

「いいじやん

「だめ

「いいじやないキー ホルダー ぐらー

「だめなもんはだめ

「けち!…

「あ~どうせ俺はけちですよ~だ

「ま~あきらめるんだな

「いいでしょ? 買つてよネH買つて!…

とものすごい威圧感で迫つてきた

「わかつたよ、買つてやるよ」

「合計で6800円です」

そして帰り道

「なんだよキー ホルダー ねだりやがつて、あれが無ければ予算内だつたんだぞ

「いいジャン別に

「2000円もしたんだぞ2000円も、大事にしろよな」

一瞬俺はクラッと来た

(ヤベ～やっぱ俺無理しすぎたかな?)

「さあ～ね」

「塙瀬君?」

「なに?」

「大丈夫?」

「なにが?」

「さつきからフラフラ歩いてるし、なんか顔色悪いよ」

「あ～大丈夫、大丈夫疲れてるだけだから」

と氣の無い声で俺はメイカに倒れこんだ

第6話 メイカの家で・・・

「塙瀬君？」

「なに？」

「大丈夫？」

「なにが？」

「さつきからフラフラして歩いてるし、なんか顔色悪いよ」

「あ～大丈夫、大丈夫疲れてるだけだから」と氣の無い声で俺はメイカに倒れこんだ

「ちょっと！－！なにすんのよ！！」

「あ！ごめん」

とメイカから離れる。

「ホント大丈夫？」

「ああ、こんくらいだいじょうぶ・・・」

とまた倒れた。

「たくつ無理しちゃって」

メイカはあるうことかなんと俺をおぶった。

「いいって、別にちゃんと歩けるから」

「ばかじゃないの？そんな体で」

「すまねえ／＼な」

「勘違いしないでよ？この前かりを返すだけなんだから」「はいはい」

(そうよこれはかり返すだけなんだから)
そこからは俺は記憶はなかつた。

「ただいま、お母さん？、氷枕と水とタオル

「お母さんならいよいよ、出張」

「なら文也でいいや、持ってきて」

「なんで、お姉ちゃんにかかったの？」

「いや私じゃなくてこっちにね」

「あー智明さんじゃん、家に帰せばいいのに」
「駅からは私の家のほうが近いでしょ？」

「つか病院いけよ」

「ここの時間じゃどこも空いてないでしょ。それに里奈ちゃんに教えてもらつた総合病院も遠いし」

「わかつたよ、持つてくる」

と文也

目が覚めたら見覚えあるような無いような部屋にいた

「ここは？」「ホツ」「ホツ」

「私の部屋よ、目が覚めたみたいね」

「大丈夫？まだ顔が真つ青だけど、今夜休んでいいば？」

「大丈夫、なら俺もう帰るな、わりいゝなんか迷惑かけたみたいで」とベッドから出る俺。しかし頭がボーッとして平衡感覚を保てない。倒れようとする俺を受け止めた。

「今日はこれ以上無理しちゃだめ。休んでいいで」

「NOだ。お前の部屋じゃ直るもんも直らネエ」はあはあとまた立ち上がりメイカを振り切り出てこいつとする俺。しかしまた意識を失った。

「そんな体で一人前に文句いつて。ちゃんと元気になりなさいよ？じゃないと私が困るんだから」

そして翌朝目が覚めると

「具合どうですか？」

そこには文也がいた。

「あれ？お姉さんは？」

「お姉ちゃんはさつきまで起きてましたけど、疲れちゃつたみたいで・・・」

下を見てみるとメイカが気持ちよせりに寝ていた。

(ありがとな桜井)

「はいこれおかゆです。」

「ありがとう、ちなみにこれは・・・」

「心配しないでください僕が作りました」

「いただきます」

と一口。

「うめ～」

食べ終え

「セーてもうつでるか？なんかごめんな迷惑かけた上に食べさせてもらって」

「いいですよぜんぜん」

「こつちこそこんなバカ姉貴に付き合つてもらつて、実はお姉ちゃんに来てからいつも智明さんのことばっかり言つんですよ。『運動神経ののだめだめ男』とか『下着を見よつとする変態男』とか。」

「あいつ！？」

「行くことが決まったときも『なんであいつと遊園地いかなきやなんないわけ？』って愚痴つてました。でもなぜかな？あんなこと言つてるのに僕にはかなり嬉しそうに見えました。僕にはお姉ちゃんのそんな顔久しづりに見ました。ほんとありがとうございます」

「そんな言われることしてないって。」

「帰るわまじで」

部屋を出て行くとき

「ちょっとまつてく・・・」

しかし俺は聞かずにして行つた

「あ～あ行つちゃつた・・・」

玄関で靴を履いてるとガチャガチャと鍵を開ける音がする。

「あぶないわね、鍵開いてる」

俺は視線を感じて見上げてみるときれいな女人の人

「どうも」

と愛想笑い。

「あや～男～！！！」

と驚かれた

「う～んつるさいわね

その声を聞いて目覚めたメイカは玄関に向かった

「あ～、塙瀬くんだなんでここにいるわけ？」

「どうやら寝ぼけているようだ

「メイカどういうことこれは？」

と言つとメイカは

「お母さん！！」

と一気に田を覚ました。

（え？これが母親？）

（これはヤバイ！！なにを言つても信じてくれないよ・・・）

「これは・・・」

固まるメイカ。

（え～？なんでそこでとまんだよ？めちゃめちゃ誤解されんじゃねえかよ！）

「両親がいないからって男連れ込んであんたってやつは・・・」

「これは違うんです、メイカさんと遊んでて僕がたおれちゅってそれでこの家に運んできちったです

必死に弁解する俺。

「君名前は？」

メイカの母は俺を睨み迫ってきて

「塙瀬智明です」

と答えた。

すると怖い顔が一転

「あなたが？いつもメイカからきてるわよ

とあつさりとした言い方だつた。

「それにしてかわいい子ね、食べちゃいたいへり」と母親は抱きしめた

「う～っ苦しいつ。

「お母さん？」

とメイカは俺と母親を離した。

「なにするんですか？！－！」

すると文也が出てきて

「また始まつた・・・」

「お母さん男の子をみるといつもなるんですよ。母性本能くすぐるみたいで」

「なんで？文也君がいるじゃないか

「僕もされるんですよ」

(年下好きなのか？この人)

「もう帰る？智明ちゃん」

(智明ちゃん なんつて・・・)

「ええ帰りますけど。あの～すいません・・・その呼び方やめたもうえませんか？」

「それならケーキ買つてきたんだけ良かつたら食べていかない？」

「いや遠慮しどきます」

「気にしないで智明ちゃん」

とメイカの母は強引に俺を中に入れた

「ちょっとお母さん。塚瀬くん迷惑してるでしょう？」

と引き止めるメイカ

「いいじゃんいいじゃん。メイカの彼氏なんでしょう？」

「そんなんじゃないって」

とメイカは慌てて否定した。

「なにあかくなつてのよ。かわいい」

(わかりやすいんだから)

ということでリビングに連れて行かれた。

俺はこの状況を笑うしかなかつた。

「『めんね？お母さんたら』

「いいつて別に。兄貴のことがあつたからこれでチャラだな。」

そしてケーキがてきた

「智明ちゃん、どれがいい？」

「だからその呼び方やめてくださいって」

「これでいいです」

「メイカは？」

「べつにどれでも」

メイカは俺と「同じものを食べる」とになった

「あ、私のよりも大きい交換してよ」

とメイカは俺に言つてきた

「そんなわけねえだろ。同じ大きさだろ？」

「いや、微妙にそつちが大きい」

「いや同じ大きさだ」

「そつち大きい」

するとメイカの母は笑顔でメイカを殴つた

「お密さんにそんなこといわないの」

と二「ヤカニ」言つた。

（殴つたよ・・・しかもグーで。）

俺は耳元で

「ざまあみろ」

と言つと

メイカの顔が赤くなつた

「なによ！――！」

とかかってきた

「どうしたの智明ちゃん？」

「なんかメイカさんが訳も無く飛び掛つてくるんで困つてるんです
よ」

「「「」！メイカもう中学生でしょ？そんなことしないの
と叱られた

「ごめんね？あやまりなさいメイカ！――！」

「いやよ」

「メイカ！――！」

「『めんなさい』」

(仲のいいこと)

そしてケーキを食べ終えメイカと文也に送つてもらつた
「ほんとすまなかつたな、なんか『あそづままでなつちやつて
勘違いしないで踏み切りの借りを返しただけだからね。」

「はいはいそうでしたね」

「ほんとはあのまま放つてくつもりだつたんだからね」

「ホントは心配だつたくせに」

「クソガキは黙つとく」

と文也をグリグリした。

「あれ？ 昨日一晩中つきつきりで看病したのはだれだつけ？
下の名前をしきりにいつて手を握り締めたのは？」

顔が赤くなつていくメイカ。

「寝てる間に智明さんにき」

メイカは文也の口をふさいだ

(うそ！…あいつ見てたの？…どうじょう)

俺が寝てるとき

「ぐつすり寝てる」

と俺の寝顔をみてメイカの顔は赤くなつた。

(ここは私の部屋、いるのは私と智明2人だけ。ヤバイなんか緊張
してきた)

(誰もいないよね)

と俺の顔にメイカが顔を近づけた

ぎーとドアの音

「わたしなにやつてたんだるつ、なんであいつなんかに・・・」

「文也あれ見ちゃつたの？」

「偶然通つたらドアが開いてて見えたんだよ」

「なんのことだ？」

「ううんなんでもないの」

「実は・・・」

と俺の耳元で話す文也。

「つむーーーまじでーーー」

「お前おかゆにチヨコムートーいれよ!」としてたんだって? やめんな
な殺人料理」

それを聞いたメイカは胸をなでおろす

「なにが殺人料理よ」

「だつてそりだろ? あんなん食いもんじゃねえもん」

「なんですか? ! ! ! !」

「なんだよ? ! ! ! !」

(元気になつてよかつた)

第7話 兄の・・・(前書き)

今回は視点を変えてお兄さんのお話です。

第7話 兄の・・・

僕の名前は塙瀬翔太25歳。普通のサラリーマンです。

家族は姉と弟の3人暮らし。両親はいません。母は僕が中学に上がつてすぐに、父は中学3年の時に亡くしました。祖母と祖父の援助もあり、有名国立大を卒業しました。そして一流企業に就職。趣味は野球。自分で言うのもなんだがプロのスカウトに注目されているようです。自分ではなんで自分なんかがと思っています。といふことでそんな僕のある一日です。

AM 7:00

「朝だぞ～起きんか～コラ！～！」

という声覚ましで起きます。ちなみにこの声はラッセル神山というプロレスラーです。

AM 7:15

まだ完全に開ききらないまぶたをこすり洗面所で顔を洗い、歯を磨きます。

顔を洗うときはまず3回水で洗いますそれから洗顔フォームをつけて3分間洗います

そして洗い落としそれからまた10回洗います。歯を磨くときは歯ブラシの4分の3は磨き粉つけてそれぞれ10回ずつ磨きます。それで口が覚めます。

AM 7:25

着替えも済ませ朝食の時間です

「翔太さん、はい」

朝食は弟の幼なじみである里奈ちゃんが作ってくれます。彼女の料理は絶品です！！

こんな彼女を持つ弟をうらやましいと思います。ちなみに今日は豆腐とわかめの味噌汁、卵焼き、めざしにゆで野菜、ごはん、味付け

のりです。

「今日もおいしいね、里奈ちゃん」

と僕が言つと

「そんなこと言つてもなんにもできませんよ」と言つ里奈ちゃんが一囁きと微笑む。毎朝彼女の笑顔でその日一日のエネルギーをもらつて、家をでます。

AM 7：40

駅のホームで電車を待ちます。

「おはよう塙瀬くん、昨日の試合どうだった？」

「おはようございます、先輩」

と話しかけてきた女性は福田陽子さん。僕の上司であり、憧れの人です。

昨日の試合というのは、僕の会社の近隣と会社5つで土田・祝日にリーグ戦をしているのです。その5社の中には去年都市別対抗戦で優勝したフィナーハクスやおととしプロ野球で2年ぶりに三冠王になつた上松弘毅を輩出した全日本鉄などがあります。うちの会社というと弱小チームで万年最下位だったのですが、今年は最下位どころか優勝争いをしています。

専門家いわく僕がレギュラーになつたことであちやんと攻守の要がしつかりしたこと。確かに前よりはエラーは減つたけど・・・。ちなみに僕は4番でキャッチャーです。

「なんとか勝ちましたけど」

昨日は首位攻防戦で勝てば首位になれるという試合だったんです。

2-1で負けていたのですが、9回裏に僕が逆転3ランホームラン打つてサヨナラ勝ち。

「よかつた」途中までみてたんだけど急に仕事はいちやつて。そう勝つたんだ?」

そんな喜ぶ先輩を見て顔を赤くする僕。そうなんです。僕は先輩のことが好きなんです。

なんですが・・・彼女は気づいてないよ。

AM 8:20

先輩と話しつつ、電車に揺られて40分、会社のタイムカードを通してします

「おはようございます」

「また先輩と一緒に来たんだ、ここ最近ずっと一緒にきてるよね？」

「狙つてんの？」

「違いますよ。電車に乗る時間が偶然一緒なだけで・・・そいつこそ下山さんと一緒にきてるじゃないですか」

「あいつが無理やりしかたなく・・・」

この人は僕の同僚の神崎雅哉。下山さんは下山麗香。この2人とは高校からの付き合いです。

「昨日の試合見たよ、すげかったね、あのホームラン。見逃せば完全ボーグだったのに」

昨日の試合の9回裏2死2・3塁の場面相手が思い切って低めのボール球投げてきたんです。球種は相手のウイニングショットである内角低めのスライダー。

「ありがとうございます、あれは体が自然に反応したんですよ。偶然です偶然」

この人は僕の所属部署の部長です。部長は2年前奥さんに子供を残し逃げられ、部長が1人で子育てをしているそうです。

AM 8:50

仕事開始です。僕の部署は営業部。さしそく外回りです。いま力をいれてる新商品を持って陽子先輩と一緒に

「ぜひ、わが社の新商品を！――！」

「新商品にはちょっと・・・」

「売れてから来てくれ」

「信用できん」

と一流企業とはいえ現実は厳しいもの。

「同じもだめだった・・・」

「弱音をはかない、次がある」

と笑顔で励ます先輩。いつも前向きな先輩。そんな先輩だからこそ。
・

PM 12:30

午前の外回りを終え、先輩と2人で定食屋で昼食をとります

「あ～つかれた」

「でも久しぶりにお昼に昼食とれるじゃないですか」

「それはそうだけど」

先輩はいつも粘る。長い時には3時間。そりやつて顧客を増やしていくのです。

そのせいではとんど昼食の時間帯がずれるのです。

「雅哉くんあ～んして？」

「やめろって恥ずかしいから」

といつもアツアツぶりを見せ付けられます。

「あらら！アツアツぶりを見せ付けちゃって」

と先輩がからかうと雅哉くんが否定しました

「先輩そんなんじゃないですって」

「なに言つてんのよ、照れちゃつて。雅哉くんつたら」と麗香ちゃんは腕を組みました。

「照れてない、照れてない、てか離れる」

高校のときから麗香ちゃんは雅哉くんにべつたりでした。なにをするにも一緒だったのを覚えています。彼女たちは中学からの仲でその当時からこんな感じだったんだそうです。

そんな彼女に嫌がる態度を見せるも実はまんざらでもない様子。

「私達も腕組もうか？」

と言つ先輩。

(え?)

戸惑う僕。

そして僕と先輩は腕をくんだ。

(僕今、幸せ、せつせせ先輩とつでくんでる)

だんだん顔が赤くなつていく。

「塚瀬くん、塚瀬くん」

そしてすぐに正気に戻つた

「たく塚瀬くんつてば、腕組んだだけかおあかくなつちやつて」

「すいません」

「まあそれがアンタのいじごあるんだけどね」

PM 1:40

仕事再開。また外回りです

「よろしくお願ひします」

「この商品をどうか」

「ぜひ、この商品を」

「だめ、だめ」

「ぜひいただきたい」

「前向きに検討してみます」

と粘りの交渉は延々と続き氣づいてみると夜8時でした。

「ごめんね、また遅くなつちゃつたね」

「いいですよ、今日は練習もなかつたし、本当に先輩と働ける夢の

ようですよ」

「ありがとう」

(ほんと夢のようだ、いつも先輩のそばにいたられるなんて)

PM 8:00

仕事も終わり、いったん会社に帰ります。そして練習も休みのため先輩たちと4人で

飲みに行くことになりました。近くの居酒屋に入りました。でも僕、お酒はすきなんですが弱いんです

しかも酔いだと

「麗香ちゃんおっぱい小さいね」

とか

「麗香ちゃん雅哉どんのペースでやつてんのとかしまいには

「先輩と麗香ちゃんどっちがおっぱい大きいでしょう。」
と触りだす始末。もちろん記憶はありません。

先輩も先輩で

「神崎！…実際下山のことどうおもつてんのよ。」

「好きなんでしょう？好きっていになさこよ意氣地なし」と酔つて暴走しだす。これもまたいつものこと。

そして先輩と何件かはじごして姉さんとでくわしました。

「翔太、また酔つたな」

「なにが悪い！…」

「そうだそうだ」

先輩も同意しました。

「陽子ちゃんまで…」

次の店で

「僕は先輩が好きだ／＼！」

と叫びました

「そうかい、そうかい、私も好きだよ。あんたのこと」「それじゃ〜

「は」今日はここまで

と姉さんは先輩を家まで送り、ベッドに寝かせました。

そして僕達は自宅に戻りました。すると弟の友人たちが来ているようでした。

気づいたら翌朝でした

「イタタタタ、頭痛い…吐き気がする」

「どうやら一日酔いになつたみたいです。」

そして居酒屋の後の話をきいて自己嫌悪に陥ります。

その中で先輩への想いを酔つた勢いで叫んだ。そうで今度は自分の力で一発・・・

第8話 テスト勉強で・・・

6月の終わり、梅雨の真っ只中。

「ねえ～荒木さん、ちょっとノート見せてくれないかな？」

「う～」

とおびえるように去つていった。

「おお！塚瀬新しいの入つたぜ、ホラやるよ」

とクラスメートの真木に渡されたのはエロ本だった。

「おい！こんなんいらねえよ！！真木～」

と叫ぶがどこかへいつてしまつた。体力測定の一件以来、女子には避けられ、男子にはエロ本やエロDVDを大量に貰つようになつた。しかもそれ以来奴隸生活を強いられる始末・・・

「あ～またもつてきてる。エロ本いやらしい～」

とわざと大きな声でマイカが言つた。

「おい？大きな声言うなよ」

と耳元で囁いた

「だつて事実でしょ？」

「これは男子達が勝手に持つてきてるだけだ。断じて俺のものではない！」

「でもいま塚瀬くん持つてるのはなに？」

「これはあいつらが勝手におれに渡してくるだけで」「聞いた？みんな、男子たちから奪つてるんだって」

「そう言つてないだろ？」

(くそ！～またこの女)^{アマ}

「まあ塚瀬君だから仕方ないか」

「そうよね」

と女子は納得した。

「そこで納得すんな」

「塚瀬くん？完全に変態つていうレッテル貼られたね」

とメイカは「」しながら語った

「だれのせいだよ、だれの」

俺は拳を握り怒りを抑えて言った。

「でもテスト勉強進んでる?」

「まだあんまりやつてないけど。珍しいな桜井。そんな話するなん

て、もしかして自信ないのか?」

「そんなわけないでしょ?」

(実際あんまり勉強していないからヤバイんだよね)

「そうだ、みんなでテスト勉強しよう。テストまであと一週間だし、

そろそろ本格的にしないとな」

とこうわけで里奈や園田たちにも話しついでテスト勉強することになつた。

「」分なんいんだけど?教えて

メイカに見せられたのは英語の問題だった。

「いやだね、なんでおまえなんかに教えないといけねえんだよ」

「教えなさいよ」

「やだ」

「教えてください」

「絶対やだ!」

「へへこの間恩忘れたつもり?それに勝負に負けたでしょ?」

(また出たよ・・・反論したいんだけど。こつものようになるから
こじは)

「」の間?なんの」とだ?「

とぼけてみる

(完全に忘れてる・・・)

「」の間つてクライスランドの」とか?「

「へへなんかあつたんだ」

「あつたね。これは智明聞いてあげるよ。」

「なんもないから、期待するような目で見ないでくれ」

それでもみんなの熱い視線を感じた。

「とぼける気？」

「別に。とぼけてなんかねえよ。なんのことだよ？」

（また始まった・・・）

「別にそれでもいいわよ。私にいきなり倒れこんできたのは誰？」

「あれはほとんど歩けなかつたんだからしかたねえんだ」

「女の子におぶらせたのは？しかも重かつたし」

「あれはお前が勝手におぶつたんだろうが」

「なんかさりげなく誘導尋問されてる感じじゃない？」

「そうだね・・・」

「私の家に泊まつたのは？」

「知らねえよ。気づいたらお前んちだつたんだから。」

「しかも、母親に誤解されるし。そんな関係じゃないのに」

「それはお前の態度の問題だろ？俺には関係ないじゃん」

「もとはといえばあんたがウチにきたからでしょ？」

「誰が連れてきたんだよ！？誰が。俺一度気がついたとき歸りつと
しただろ！」

ケンカはヒートアップしていく。

「やれ、やれ、もつとやれ」

と浜島はヤジを飛ばす

「お前は黙つてろ」

「あなたはひつこんで」

と2人は浜島を

「まあまあここで止めとけって」

「はいはいここまで」

「離せよ憲ちゃん」

「離しなさいよ」

と里奈と園田が止めに入つた。

「は～」

里奈と園田同時にため息。

「たく2人とも子供なんだから」

「……じゃん2人とも楽しそうで」

「そうだけどさ。こう顔見るたびケンカして。少しは止める立場も考えてほしいよ」

「確かに・・・」

「まあ見守つてこきましようか。あいつらを。この先どうなるかわからないけど」

結局勉強を教えることになつた。

「ほんなんもわからんねえ～のか？お前それでも受験生か？」

「これは、こう使うから、だからそうなる。」

（こういつ、意外とやるじゃん）

「わかんない、もづけようとわかりやすべ」

「え～」

（こういつどれだけレベル下げておしえないと困ねえ～んだ）
と考えているとある名案が思いついた

「里奈？こういつの英語みてやつてくんないかな？俺限界」

「いいけど、私下手だよ？」

「いいよ別に」

「どれどれ、あ～智明がいつてたのはこうの用法のこと。こういつときこの意味になるんだ。だからこうなんの」

「あ～ね！！里奈ちゃんわかりやすい～！誰かをこと違つて」

とこういちに鋭い視線がむいた。

「わるかつたな。わかりにくくて」

「なに勘違いしてんの？だれもあんたなんて言つて無いじゃん」

「ならなんでこういつに向くんだよ。」

「偶然よ、偶然。」

（こうのアマ。殺す、殺す、ぜつてえ呪い殺してやる。）

「今度は数学なんだけど？」

「数学ならこうにスペシャリストがいるよ。いつも数学だけはいつも満点捕る人が」

「誰？誰？」

「浜島祐一くんで～す」

「ほんと？教えて教えて」

「メイカちゃんに教えるなんて夢見てるようだ。」

(もういいから一生夢見てる)

「でどこがわかんないの？」

「ここなんだけど」

「あ～。ここのか。このグラフは×が〇のとき、×が2になるとだよね。
まずそこは点かいてみよう。」

「こう？」

「そうそう

と浜島は異様にハイテンションである。

「それから？」

「後は簡単+は×が一つ増えるたび2つ上にいく。
が一つ減るたびに2つ下にいく。この場合はね」

「なんで」

「とにかくxについている数とその後の数字分動かす。この場合は
 $y = 2x + 2$ だからこうなるの」

「わかった？」

「うん、なんとなく・・・」

と不安を残すいいかただつたが

「次は・・・こうでしょ？」

浜島に見せてみる。

「そうそう」

どうやら正解らしい。その後3問連続正解した。

「すごい、すごい！～！メイカちゃん飲み込み速いね？」

「教えてがいいからだよ」

「みんな聞いた？教え方がいいからだつて？」

「いつものように浜島は調子に乗っていた。

「まつといまつとこ」

と俺たちは浜島を無視してそれぞれの勉強を進めた。

「今日は理科」

「理科なら憲ちゃんだね」

「どれ？ これか！ これは・・・」

と園田が教えた。

「うんうん」

「わかったよ。す”いみんな。なんでそんなに教え方が上手なの？
一人を除いて」

とメイカは俺を見て言った。

「わる～”じやいましたね。教え方が下手で」

「だつてホントのことじやん、教え方下手なのは」

「口をはさむようだけどさメイカちゃん？ 智は英語に関してはホントわかりやすいよ

（わかってるわよそんなこと）

こつしてみんなそれぞれ勉強して1週間が過ぎテス”トの日をむかえ
た。

第9話 期末テストで・・・

「塙瀬くん? もし今回のテストで私に勝つたら私の言いなりの生活から開放してあげる」

（どうしたんだ? いきなり。もしかしてこの1週間で勉強できたと勘違いしてんだな）

（なにはともあれあいつの奴隸生活から開放されるんだ。いろいろひどいことをされたもんな）

（とやられたことを思い出してみる。

まずは、女子の着替えてる教室に入れられただろ

それから自分の宿題をやらせたり

いきなり朝早く呼び出し食らって1日中荷物持ちさせられたりもしたこの1ヶ月半、あいつのパシリになっていた。

テストは始まった。今日は英語と社会だ。どちらも俺の得意教科である。

（よし、これで点数稼ぐぞ）

俺たちの学校のテストは50点満点である。それでいつも英語と社会は8割以上つまり40点以上とっている教科だ。

1時間目は国語である

（あ～これはこれでこの問題はどうちだつたかな? ・・・）

（あぶね～名前書いてなかつた! ! ! ）

（これはこれだから、これはイ、これは・・・）

ふと俺は周りを見てみた。すると1人名前書いてない答案を見つけた。見上げてみるとメイカだつた。

（こいつ、名前書いてねえじゃん）

それに気づいてメイカはこっちを向く。

（なにこつちみてんのよ? もしかしてカンニング? ）

俺たちはにらみ合つた。それに気づいた先生が

「「ひのや」、なにやつてんだ」と注意される。

「先生、塚瀬くんがカンニングしたんですね。」「とこ'うメイカ。

「やつてない、やつてない。やつてないですよ、先生」

「だつて私の答案見て鼻笑いしたじゃない」

「そんなことしてねえし。また、なんでこいつもでたらめなことこつんだよ」

「でたらめじやないわよー確かに見たんじやない。」「見てない！…」

「見た！…」

「見てない！…」

「見た！…」

いつものようにケンカしていた俺たちに先生はしびれを切らし「あ～もひつるわ～い！…どつちでもいい！…今はテスト中だ～！」

と怒鳴られ、俺たちは廊下に立たされた。

「どつしてこ'うなるのよ」

とメイカが不満げにいった。

「当たり前だろ？ テスト中にあんだけ言い争いすれば

「あんたがいけないんだからね。」

「何でだよーもとはといえばお前が悪いんだろ。言ごがかりつけるから」「

「なに言つてんのよ。もともとあんたが答案見るからでしょ？」

「お前の勘違い。あれば周りを見回しただけ。お前の答案見てもねえし、鼻で笑つてもねえ

「どつかしらね」

「だいたいな、お前の答案見たつてなんの得もねえんだよ」

「それどうじう意味よ」

「お前の頭に聞いてみろ」

「なんですか？」

「なんだよ」

「」「お前、ひみわれこ。外でしるー」

とまた怒られた。

1時間目が終わり休み時間

「いつもの2人ケンカしてるよね、できるんじゃない？」

とクラスメートがはなしていた。それを聞いたマイカは

「これどういうことよ」

と俺は胸ぐらをつかれた。

「おまえがそうするからだろ？」

「あんたいつも私が気の触ることするからでしょ？」

「いつそんなことしたよ？お前が勝手につつかつてんぐるだけだろうが」

きーんこーんかーんこーんと2時間目の始まりのチャイムがなった。

「結局次のテスト勉強できなかつたじゃネーかよ」

「あれ、次英語でしょ？得意科目じゃなつかつたつけ？」

「そりだけど。一応確認したいとこがあつたの」

「へ～自信ないんだ？」

「なわけねーだろ！」

「はい！テスト配るんでしゃべらないでください」

と英語のテストがはじまった。

俺はすらすらと答案用紙を埋めていく

（楽勝！今回も40点は堅いな）

一方マイカは

（これなんだつけ？あ～こうだ。あつと智明に教えてもらつたところだ。らつきー）

と少しは詰まりながらも順調にいつていふよつだ。

きーんこーんかーんこーん

「はーーそこまで後ろから集めてきてください。」

「きょうはこれで終わりです。毎に終わったからつて遊びほつけな

いよいよ。明日もテストがあるんですから。」

「今日どうだつた？」

と帰り道5人で話していた。

里奈「英語のあの問題わかつた？」

俺「あれはあれだろ？」

園田「あそつか！ そうだつたのか。わからなかつたよ」

浜島「そうなの？ 俺こうしたんだけど？」

俺「あ」それまちがつてる。それはテストが終わつてから詳しく述べ
メイカ「全然わからなかつた。英語。教え方がいい人ばかりの中1
人だけ悪い人がいたわね。きっとそのせいだわ。」

「なんだと？」

「そこでこらえるー智」

「メイカもメイカよいつも智明のことになるといふなんだから」
そして里奈は耳元で

「たまには優しくしないと嫌われるよ。智明に」

メイカは顔を赤くして

「なんでそういうこというのよ。里奈ちゃん……なんでもないんだ
からね。」

必死に否定した。

「ならなんで顔赤くなつてんのかな？ 教えてよ」

「それは・・・」

と口ヒもるメイカ。

「それは？」

追い討ちをかけるように聞き返す里奈。

「暑いからよ。暑いから」

「そりなんだ？」

(あああごまかされちゃつたな)

「なに耳打ちしてんだよ里奈？ それに桜井顔赤くなつてるし」

「なんでもないよ」

「そつか」

(変だ。なにをふきこんだんだ? 里奈はと俺たちはそれに家に帰った。

俺は家で

「これわかんねえや。お兄ちゃんが帰つてきたら教えてもらおう。
あいつちゃんと勉強してつかな」

ふと俺はそう思った。

「なにじつてんだろ? おれあいつがテストが悪くても関係ねえのに。
・」

ガラガラガラとドアが開く音がした。出でみると里奈だった
「智明? 晦、まだでしょ?」

「うん」

と晦食の冷やしそうめんを食べていた。

「勉強進んでる?」

「まあぼちぼちね。明日はなんだつけ?」

「明日は・・・なんだつたつけ?」

「もしかしてメモってないとか?」

「うん」

「なんだよ、それ! テストの時間割ぐらいメモッとかよ」

「待つてて今時間割もつて来るから」

と俺はカバンをあさり、テストの時間割をコピーして里奈に渡した。
片付けも終え、里奈は帰り俺はまた勉強を始めた。

そして2日目

「はいそれではテストを行いますので、教科書やノートはカバンに
しまつて、教室の前か後ろにおいてください」

1時間目は数学である。

(やべえ~全然わかんねー。一夜漬けはやつぱきつかったな・・・
(びつしょ~・・・全くやつてなかつたもんな・・・これは負けた
な・・・)
とどっちもふるわなかつた
きーんこーんかーんこーん

「どうした？智明、メイカちゃん死んでるぞ」

「聞くな」

「聞かないで」

俺とメイカは魂がぬけたように歩いた

2時間目は理科

(よし、あ、これはい、これは……だから)

俺は順調に問題を解いていく

一方メイカは

(これなんだっけ？、えっと、これ園田くんから教えてもらつた！
確かに教えてもらつた……んだけど。ナンだつたっけ？)

こちらは苦戦しているようだ。

3日目、最終日と試験をこなしていった。

最終日は試験が社会しかなかつたため、2時間目は学年集会だった。
この日は主に服装検査やテスト後の注意であった。

服装検査に俺とメイカと園田がひつかつてしまつた。ひつかかると
みんなが帰つた後も集められ、説教されるのだ。

「最近お前らはたるんどる」

と体育教師の平屋が前で叫べば

「今のお前にちゃんとしないでどうするんですか」

と学年主任の松本がヒステリックを起こし、しまいには
「禁止事項を搔い潜ろうとする反骨精神はすばらしい」と
となぜか俺たちをほめるボケた先生が出てくる始末。

俺にとつては迷惑な話だ。俺たちは先生が話してゐる途中

「ば～か、ひつかつてやんの」

「あんただつてひとのことをいえね～だろ？」

「俺のほうがあんたより軽いもん」

「でもひつかつたのは事実でしょ？」

「ていうかなんでこんなことあるつて教えてくんなかつたのよ

「知るかよ！～そもそもお前が引っかかるのが悪いんだろ？」

「なんでそうなんなるのよ？」

「だつてそうだろ！！」

「いまここでケンカしたら確實に職員室行きだぞ」

と園田が止めるも

「つるせー」

「つるさい」

と2人は聞き入れず

「だいたいなお前の強引な理屈で人を振り回すところが嫌いなんだよ

「私はあんたの・・・」

となれば園田も手が付けられない。そして

案の定俺たちは先生に見つかり、その後職員室に連れて行かれたのである

「なんでこうなるのよ」

「知るかよー！お前がわけのわからないことでおこるからだろ？」

「もとはといえばあんたがからかったからじゃない」

と廊下で大声でケンカをしていた。

「つるさい、少しばかりなさいーー」こをどこだと思ってるんですか

「すいません」

と2人同時で謝るのであった。

第10話 園田の誕生日・・・（前書き）

新キャラ登場です

第10話 園田の誕生日・・・

園田憲太郎 6月21日で15歳の誕生日を迎えた。しかし期末テストが近かつたためテスト終了後にパーティーをすることになった。その前に誕生日当日の1日を見てみよう。

実は園田は毎朝5・6人の女の子が迎えにくる。しかしそれを避けるが」とくいつも裏口から登校する。そっちのほうが近道らしい。学校に到着すると女子たちがざわざわと詰し出す

「園田君よ？ かつこいい～」

「園田先輩、これ」

と一人の女子がなにやらコーティングされた箱をわたした。ビックや
らプレゼントらしい。

「ありがとう」

とお礼をいようとその子は顔を赤くして恥ずかしそうにすぐ走つて去つて行つた。

「なんだつたんだ？」

と不思議がる園田。

「やつたね、あの園田先輩にわたしちゃつたよ」

プレゼントを渡した女の子は友人とはしゃいでいた。嬉しさを隠せないようだ。

「ホントにあれでよかつたの？」

「私にまかせなさい」

そして教室にいく途中智明とでくわした。

「おう！ 憲ちゃんおめでとう」

「何言つてんだ？」

「あれ？ 憲ちゃんの誕生日つて6月21日だったよね？」

「うんそうだけど・・・あ！」

と思いついたように急に大きな声をだした。

「今日誕生日だつたんだ。だからか」と園田は一人で納得した

「なにが?」

「いや、さつき校門でこれもらつたんだよ

と智明にその箱をみせる

「珍しいな、お前にプレゼントなんて。もしかして親衛隊か?」

「それはない」

園田の熱狂的なファンが集まる親衛隊がある。

「どういうことだよ」

「よくわかんないけど、規則でプレゼントを渡すのは禁止になつてるらしい」

「そうなのか」

「倉田さん、どういふこと?」

「みんなの憲太郎様にプレゼントを渡すなんて」

「憲太郎 LOVES の規約第3条第2項に書いてあるでしょ? 神聖なる憲太郎様に個人による贈り物はしてはいけないって。わかつてんの?」

と親衛隊と思われる女子3人がプレゼント渡した女の子に詰め寄つた。女の子はおびえている様で戸惑つていた。

「ちょっとあんたたち、菜々(なな)ちゃんが怖がつてるでしょ? やめなさいよ」

とその女の子の友人と思われる人がとめに入った。

「だつて、あの憲太郎様にプレゼントを渡したのよー大問題よ、大問題」

「いいじゃない別に。菜々ちゃんがあんなバカげた集団に入つてゐわけじゃないんだし。プレゼントぐらい」

「確かに園田先輩は顔も良くてスポーツ万能で素敵だと思つよ。思うけど私はそこまでカッコイイとは思わないな」

「なによ、私達の憲太郎様を侮辱する気?」

「私はただ、自分の意見をいつただけよ。」

「行こう？ 菜々ちゃん。こんな人たちいたらバカがうつる
何ですって！！！」

「まあ先輩に気に入られるようにがんばってね。無いとは思つけど
「なによ、あの女！！」

と親衛隊の隊長と思われる一人が悔しそうに歯軋りした。

「ごめんね、みなみ美波ちゃん」

「別にいいって。でもよかつた。自分から行動したのって初めてじゃない。それが私嬉しいの」

と嬉しそうな美波。

「いや、美波ちゃんのおかげだよ。渡せたのは美波ちゃんが私の背中をおしてくれたから」

(やっぱり美波ちゃんはすごいな)

そして昼休み

憲太郎たちはいつもの5人と話していた。

「今朝、プレゼントもらつたんだよな。開けたのか？」

と智明が聞いた

「いやまだ」

「なんだろうな、開けてみるよ」

と浜島がいう。

「なに、なに？」

とメイカは興味津々

「早く、早く」

と里奈が催促する。

開けてみる

「なんだこれ？」

「え？ うそだろ」

「これ？ ちょっと頭ずれてんじゃないのか」

「今何月だと思つてんだ？」

「まあいいじゃん、くれた子はくれた子なりに考えててくれたでしょ

う

「でも……」

「ね……」

中身は手編みのマフラーだった。それは1ヶ月前の11月だった。

菜々と美波は菜々の部屋で遊んでいた

「ねえ？ 美波ちゃん？」

「なに？」

「男の人気が喜ぶプレゼントってなにかな？」

「うーん……なんだろ? ねー……つむじつしたのよ? 突然」

「もしかして先輩に?」

と興奮気味に聞く美波。

恥ずかしそうにうなずく菜々。

「ホントに? よかつた~自分からしたいって言つたの初めてだよね」「でいつなのよ? 先輩の誕生日」

「6月21日」

「1ヵ月後か……そうだ!」

「思いついたの?」

「手作りよ、手作り。 そつ男は手作りに弱いの!」

と菜々は美波に言いわれたものを買つたために近くの西均に行つた。

「これとこれね」

と買つてきたのはなにやら棒と毛糸。

「これでいいの? 美波ちゃん」

「うん」

「それでこれでなにすんの?」

「マフラーよ、手編みのマフラー。」

「マフラーか、いいね。 寒い時とか暖かそう」

「そくやるひよ」

と菜々がマフラーを編み始めた。

「ここはこうでそこは……」

と美波はレクチャーし菜々はどうぞん編んでゆく。

「あつい……」

と袖で汗をぬぐう菜々。

「そこはそうじゃない。あちや・・・」

と美波はがっかりする。

「また最初からなの?」

「いや、そこまでじゃないから大丈夫よ」

とちゅうとしたミスもありながら編んでいき

そしてついに

「やつた~完成だよ。」

「これできつと喜ぶよ。先輩」

「そりかな」

と嬉しそうに言つ。

「うん。いい顔して」

「ほり自信を持つ。あんたならきつと先輩OKよ」

と励ます美波。

「ホントにあれでよかつたのかな?」

「大丈夫よ。自信持つて」

と昼休みに2人が歩きながら話していた。

「ちよつとトイレ」

と美波はトイレに行き、菜々は美波を待つていた。

「園田君、平屋先生が呼んでたわよ」

「わかった、それでどこにいるんだ?」

「たぶん外だと思うけど」

「わかった」

すると親衛隊の3人がやつてきて

「よくも私達の憲太郎様にプレゼント渡してくれたわね」

「わかつてるんでしようね」

とどんどん菜々に詰め寄つていき、そしてだんだん壁際に追い込まれていく。そしてついに菜々は囮まれた。トイレから出た美波はそれに気づく

「菜々ちゃん」

「違反した罰則受けてもうつわよ」

怯える菜々。

手を振りかざす親衛隊の隊長。

菜々は目をつぶつた。

しかし何の衝撃もなかつたので恐る恐る目を開けてみると、
するとそこには腕をつかんだ園田がいた。

「これはどうことだい？説明してもらおうか」

「先輩！！！」

と嬉しそうに菜々は園田の後ろに行つた。一方3人は驚きを隠せないようだった。

「これは・・・」

「この人憲太郎」LOVESの規約を破つたんです。」

「だから・・・」

「だから？」

「罰を」

「いくら規則を破つたからってこいつ卑怯なやり方は見過ごせないな。この俺を尊敬してくれるのはありがたいけど」優しい笑顔でいった。その中に3人は怖さを感じたようだ。
「憲太郎様が助けにもらつたからいい気になんないでよね」と3人は逃げるよう而去つていった。

「大丈夫？ケガは？」

「ないです」

と緊張する菜々

物陰からみる美波

(がんばつて)

「たく、ごめんねあいつらが迷惑かけちゃつて」

「いえ、そんなことないですよ」

「あいつらやり過ぎなところはあるけど、根はみんないい奴だから。
あんまり悪く思わないでくれ」

「はい」

今朝のことと思い出し

「プレゼントありがとうございます。とても気に入ったよ」

「ありがとうございます」

と顔を赤くする菜々。

いい雰囲気の2人

「あのさ、聞きたい」とあるんだけどさ。いいかな?」

「なんですか?」

「なんでこの時期にマフラーなのかな?」

(あ!)

と気づく美波であった

第10話 園田の誕生日・・・（後書き）

読んでいただきいた皆さん本当にありがとうございました。ついで10話までいかせていただきました。

できればダメ出ししていただければ嬉しいです

第11話 メイカの・・・(前書き)

たぶんいろいろと矛盾してゐるところがあるかも・・・

第11話 メイカの・・・

4月の末、ゴーリーテンウェークが始まった頃
ほんの～ちい～さなでき」と「～
と俺のケータイがなつた。

「もしもし」

「あつ塙瀬くんちょっと来て欲しいんだけど?」

「ふざけんな!～今何時だと思ってんだよ!～」

時計は6時を指していた。

「今すぐじゃないわよ。9時に白鷹駅のあの鈴のところに集合ね。
「おい!勝手に決めんなよ。うちからどんだけかかるかわかつてん
のかよ」

「なによ?この間の勝負に負けたでしょ?」

「桜井?」

「ならそういうことで。遅れないでよ」

「ちょっと待てって」

ブチッ

ブ～ブ～ブ～

と切れた。

「たくつ人の都合もおかまいなしかよ・・・」

この間の体力測定で負けてからというもの俺は地獄の日々を送っていた。

そして約束の時間指定された場所に行くと

「あれメイカちゃんまだ来てないね」

「なにやつてんだろうね?」

と女の子が話していた。見知らぬ人たちだった

「桜井のやつまだきてねえ～のかよ。」

そして10分後

「おまたせ」

とメイカがやつてきた。

「遅い」

「そせ～ぞ」

と女の子と俺が同時に言った。

驚く2人。メイカの知り合いのようだ。

「え？ あなたは？」

と聞く一人の女の子。

「どうも、塚瀬です」

「メイカちゃん？ どういうこと？」

もう一人の女の子がメイカに聞いた。

メイカは俺を指差して

「この人？ この人は私のパシリ。今日は荷物もちしてくれるって」

「おい！ いつからパシリになつた？ それになんで荷物もちなんだよ。

「何言つてんのよ？ あんた体力測定に負けたじゃない。それに男の子が荷物もちは当たり前でしょ？」

「勝手に決めやがつて。それでなんで俺が朝っぱらから

「ちょっと2人とも」

と止めに入る女の子

「忘れたの？ 私に負けたら言いなりになるつて」

「知るかよ、だいたいお前が先にけしかけたんじゃねえか」

「なによ？ のつたのはあなたでしょ？」

そしてその女の子がしごれを切らしたのか

「いいかげんにしろ～～～！」

とメイカに横から右ストレートが炸裂した。

「ちょっと、なにすんのよ」

とパンチが飛んできた方向をにらみ付けると

「いくよ」

とものすごい形相でにらみ付けていった。

「はい」

そして俺たちは歩き出した。

メイカの話によればメイカの前の学校の友人、玉山明日香ちゃんと松本和美ちゃんはこの「ゴールデンウイークを利用して遊びに来た」という。しかしメイカはきたばかりでんまりわからないため、俺を荷物もちを兼ねて案内して欲しいということだ。

「ごめんね？ 明日香ちゃん。」

と謝るメイカ。

「いいよ。いつものことだから」

（こわ～～！！）この人怒らせたら命がいくつあってもたんねーかも・・・

「やつぱり明日香ちゃんのは効くよ」

「ごめんね、なんか見苦しいもの見せちゃって」

「いいよ、全然気にしてないから」

「てかこっちがすつきりしたし」

と俺はぼそつとつぶやいた

「なんかいました？」

「いえ別に」

と話して最初に向かつたのはこの街一番の繁華街地神だ。

ここはいろんな店が立ち並んでいる。

「あーここにはあつたんだ、あの店」

とメイカがはしゃぐ。その店は中高生に人気なブランド店だった。

「そうだよね、メイカ来てまだ1ヶ月もたつてないんだもんね」

（あいつにも好きなものとかあつたんだ。）

「入ろうよ、入ろうよ

とねだるメイカ。

「時間まだあるし、でも・・・どうします？」

「いいよ、私は別に」

「特にいきたいところないから」

ということでそこに入ることになつた。

「あれもいい、これもいい、」

はしゃぐのはメイカだつた。

(「へ」あんな桜井はじめて見た)

「これ着よう。塚瀬くん?」

「なんだ?」

「くれぐれも覗かないでね」

「しねえ~よ!~そんなこと」

「前科があるから」

「それはお前が無理やり入れたんだろうが」

メイカは試着室に入つていった

「見てみて、これ」

と俺に見せつけた

(かわいい~。まじかわいい)
ドキッとした。

「なんだ? それ」

「全然似合つてねえ~よ」

「どこがあつてないつて言つの?..」

「ん? 全部

「どうこいつ」とよ

と胸ぐらつかまれた

「しかたないだろ? 似合つてないものはにあつてないんだから」

「いやそんなことないよ? めちゃくちゃ似合つてる」

「かわいいよメイカちゃん」

と言われ

「そりかな?」

と照れるメイカであつた

「調子乗つてんじゃねえよ」

「ということでこれとこれお願ひいね

「何言つてんだ?」

「あんたが払うにきまつてるでしょ?」

「ふざけんなよ? なんで俺がはらわないといけね~んだよ?..」

「当たり前でしょ？この間負けたじゃない」

「また出たよ・・・」

「いいわよ？別に逆らつたって。この人のぞ・・・と突然大声を出し、思わず俺は

「わかつた、わかつた。買ってやるから」

と俺は6000円を払うハメになつた。

「マイカってホントわかりやすいよね」

「やっぱりマイカはマイカだね」

「はい、荷物」

と渡され俺たちは店を後にした。

「よし！！一肌脱いでやりますか？」

となにか明日香思いついたように言った

「どうしようとか？ご飯はまだ早すぎるし」

「そうだ！！映画見にいきましょうよ」

一行は映画館にいった。

「何見ようか？」

「いまこの映画人気なんですよ。」

「げっ！」

「あ！これ前から見たかったんだ。これ見ようよ」と明日香ちゃんと話していた。

「待つてちょっとといいかな」

と明日香たちをつれだして

「なんでこうするのよ、私が怖いの苦手なのしつてるでしょ？」

「へ～そうだったの？知らなかつたら～。知つてた？和美ちゃん

「いや。私も初耳」

と2人の白々しい態度に

「あなたたち・・・」

とマイカは拳を握り締めた

と白々しく明日香がいった。

結局俺たちは人気のホラー映画を見ることになつた。

「きやー……」「！」

と怖いシーンになつて

隣のメイカに強く手を握られ

「イタタタタ、なにすんだよ」

と俺は小声で怒鳴つた。

「じめん・・・」

(触つてしまつた・・・思わずあにつの手を)

とメイカはがつかりした

「きやー」

「イテテテテ」

の繰り返しで結局まともに見られなかつた

「おもしろかつたですね」

「うん・・・でもまともに見られなかつたよ誰かさんのせいだ」

「なんかさ怖いシーンとか盛り上がるシーンになると力いっぱい強く手を握つてくるやつがとなりにいてさ」

と俺はわざとメイカに視線を向けて話した。

「なによ? 私のこと?」

「そうだよ。だいたいなんだよあのバカ力。手が折れるかと思つた」「仕方ないでしょ? 話にのめりこんだら体に力はいりこむんだから」

「それにも入れすぎだろ? アームレスリングの世界チャンピョンでも目指してんのか?」「そんなわけないでしょ」

「はい、はいそこまで」「

と明日香が止めにはいる。

「つめるわー」

と反抗するメイカ

「おい桜井ここのはやめといひづ。明日香ひやんの右ストレートへり

いたいのか?また」

と俺はメイカをなだめた。しかし聞き入れるはずも無く

「そんなん関係ないわよ

「関係あるわよ~」

とまた明日香の右ストレートが炸裂した

「だからいつただろ」

「はい反省します・・・」

この後昼食を食べ、いろんなお店や有名な場所にいった。穴場などもいった。

そして夕方

「山口公園にいきたいです」

と和美が言い出した。そこは『テーストスポット』で有名なところだ。

「なぜにまた?」

「ここに来るなら絶対に外せないと思いまして」

(ナイス!!! 和美ちゃん)

「カツプルがたくさんいるんだよ?」

「それがいいんですよ」

「西日に照らされる海。それをバックに向かい合い口づけでお互いを感じあつ・・・なんていい所なんでしょう」

「勝手に妄想してろ」

とあつさり明日香がツツ「んだ。

山口公園に到着。

「ちょっとトイレに行つてくるね」

と2人は俺とメイカを残してさつていった。

(後は2人でなんとかしなさい)

「なんでここで2人きりにするのよ。しかもよりによつてあんたと・・・

「俺だつてやだよ」

「たく、あいつら私達のこと勘違ひしてるみたいね」

「困るよな~ こういうの。氣使われてる感じで」

「あいつらはいつもこうなの。私がこういう性格だからすぐおせっ

かい焼きたがるんだから。余計なお世話つて感じなんだけどね」

「良かつた。」

「なにが？」

「自分から自分のこと話すの初めてだからね」

顔を赤くするメイカ。

いい雰囲気の2人

（なんだよ？）この雰囲気。なんでこんなやつに俺はモヂキモヂキしてんだ？）

「私、私ね……私……」

「どうした？」

「やつぱいいや」

「でできなさい。トイレジやないんでしょう？」

とメイカが言いつと草むらの中から2人がでてきた。

「ばれちゃったか」

「私のあとはなんなの？ ねえなんなの？」

「なんでもないわよ」

（ありがとう2人とも）

そして翌日明日香たちは帰つていった。

帰つていぐときに

「メイカのことよひしきね？ ああいつやつだからふりまわされるだろうけど。」

「昨日は『めんなさい』。でもメイカちゃんはああでもしないことと思いまして。あの子には元氣でいてもらいたいですからね。」

「がんばんな彼氏くん」

「違うつて」

「一つ質問いいですか？ めいかちゃんのどこを好きになつたんでしようか？」

「だからそんなんじゃないつて」

とそれぞれに耳元で言われた。

「お前、前の学校にも一応友達いたんだな」

「どういう意味よ？ それ？」

「おまえ、前の学校じゃ孤立してたのかと思つても
「どうしてそう見えるのよ?」
「お前の性格にきいてみろよ。節六女」
「なんですか? ! ! !」
(いい友達を見つけたな。大切にすんだぞ)

第12話 パーティーに・・・

期末テストも終わり、みんな羽をのばしていた。この日は延期になつていた園田の誕生日である。開始時間は7時。みんなそれぞれおもいおもいにそれまでの時間を過ごしていた。

菜々の家では・・・

「これは派手すぎるな、これはちょっと地味かな」

「いいって美波ちゃん、そんなに」

「ダメよ。好きな人の前なのよ? しつかりよく見せなきゃ」

「ホントにいいって。早くしないと遅れちゃうよ?」

「そんなの、あんたをベストにすることに比べたらへでもないわ。それにちょっと遅れてきた方が

「すいません、服選びに時間がかかるからちょっと遅れちゃいました」

「そりなんだ。今日の服とでも似合つてゐる。かわいいよ菜々ちゃん」

「そうですか?」

「うん。とてもかわいい」

「俺、菜々ちゃんのことすきになつちやつた

「つてなるかもしねないわよ」

「そりがな? そりがな?」

とありえない妄想に何の疑いも無くその気になる菜々だった。

「今日はチャンスよ。菜々ちゃん。先輩に少しでも近づけるようにするよ。いいわね?」

そういう美波に自信がないような顔をする

「そんな暗いかおしない! もつと自分に自信持つてよ? 菜々ちゃんはかわいいんだから大丈夫よ」

「でもこの間のプレゼントのこともあるし・・・」

「何言つてんのよー向ひつから誘つてきたのよ? そんな気にしてないって

助けられたあの日私は先輩にマフラーの理由を聞かれた後

「あー、そうそう今度友達の家で俺の誕生日会をしてくれるみたいだから良かつたらきなよ」

「ありがとうございます」

(やつたーーー先輩から・・・)

「美波ちゃん、美波ちゃん？私先輩から誘われかけやつたーーー」

「よかつたじやないーーー私が服選んであげる」

「うんわかつた」

先輩から誘われ後日地図をもらつたんです。そして今日ついこの日が

「よしーーーこれでいい。」

「めちやめちやかわいいよ。これなら先輩もいつけりうね。」

「そつかな？」

と嬉しそうに言う菜々。

「よしーーー行くわよ。準備して」

「もうしたよ。」

「地図持つた？」

「あー忘れてたちよつと待つてて」

と菜々は地図取りに行つた。

「確かにこの辺だつたよつなーーーあつた」と一人は家を出た。

「確かに塚瀬つていう先輩の家だつたよね」

「うん」

「ここからどのくらいかかるかな」

「だいたい島駅から5分つていつてたからここからだと30分ぐら
いじゃないかな」

と駅に向かつていると後ろから帽子をかぶり、マスクをした明らか
な不審者が美波のカバンを取つていつた。そして2人は倒れた。

「イタタタタ、大丈夫？菜々ちゃん」

「あんにゅうーーー美波のカバンつて行きやがつたーーー追うぞ」

といきなり菜々は豹変した。 そう彼女は友達や家族など身近な他人に危害が加わると豹変するのだ。

「…」おまかせください。

菜々は美波の手を引つ張り追いかけて

ハセニ用鹽してモ様ナガヤシル

徒

(ヤハ) 這にかに一 まなかに か

卷之三

集められた記録。

そしてあつと一う

「おい！」のヤロウ美波のバッグ返さんかい！！！」

と菜々が顔面パンチ。ひつたくり犯K.O。

「あれ?」どこなの?美波ちゃん?」

田のまえの引たくなり犯を見るなり

「大丈夫ですか？」謹にやられたんでしょ？

心言葉・如云

卷之三

そこで黒髪の美波のバツグは衆つゝ

ひつたくりが解決したのはいいが、犯人を追いかけているうちに2人は完全に迷ってしまった。

「アーティの？ 美波ちゃん」

知らぬいわよ
たいたいあんたか

「ハサウエーの」

「アーティスト」

「アーティストの世界」

「うん。ちよつと待てて」

「はい」

「・・・」

「こま、日本だから・・・って」これ世界地図じゃん。しかもなんか落書きしてあるし。『ひつやつたら世界地図とおりがえるわけ?』

「『ひめん』

「しょうがない。交番い『ひつよ』

しかし・・・

「ここって繁華街だよね?『ひつみても』」

「そうだね。繁華街だね」

「なにになんで一個も交番ないのよ・・・おかしいと思わない?」

「うん、おかしいね」

ふと見てみると交番が

「あつたよ? 美波ちゃん」

(やつたー)

交番が天国に見えた。それもつかの間

「あの~ ここから栗山駅までどつじけばいいですか?」

と聞く美波

「ひつてここから右にいっつてますつぐ行つて・・・」

とその警官は美波の背中をなぞつた。

「ひい~」

「なにするんですか?」

「ごめん。つい手が滑つちゃつて」

「なにしどんじゅ~...お前は」

「め、恵さん!...」

「また女の子にちよつかいだしで。やっぱ真木くん一人には任せら

れないわね。」

「ていうか、よくそれで警官になれたわね」

「恵さんだつて人の事・・・」

「なんかいった?」

「いや、なにも」

「「「めんね、あなたたち。後でひへへ言こ聞かせとおもすから、
きつへく」

そして行き方を聞いた2人は出発。

知つてゐる道に出る寸前に

「あの子たちけつこうかわいくない?」

と話しているのは智明のクラスメートである真木と遠藤だった。

「どうする? いくか?」

「最近声もかけらんなかつたもん。 テストで」

「ねえ~君たちこれからひま?」

「すいません、これから塚瀬ていう先輩の家でパーティーがあるんで

と菜々が言つ

「バカ!..なんでこんなやつらに真面目に答へてんのよ」

「だつてひまつて聞いてたから」

と菜々が言つとため息をついてこいつ言つた。

「あのね?」のひとたちはナンパしてんの、シカトしちゃいいの
よ

(もしかして)

とよぎる真木と遠藤。

「君たち塚瀬つて言つ人の家つてど?」

「場所はわからないですけど、島駅の近くつて言つてました」と菜々は答える

(間違いない!..)

「なんでもた答えるのよ」

「いけなかつたの?」

「当たり前でしょ?」

「あいつ!..里奈ちゃんという人がいながらメイカちゃんにのりかえ、今度はこんなかわいい子をたぶらかすとは!..許せん

「いくか?」

「いくにきまつてんだろ」

「あの人たちなにぶつぶついってんだろう?とにかく私達急いでるんで、失礼します。」

「俺たちもつれつてつてもりえるかな」

「なんですか?」

「行くわよ、菜々ちゃん」

「ちょっと待つてよお願いだよ」

すると美波はにらみつけて

「急いでるつていつてるのがわかんないの?..」

「ひ~」

真木たちに膝蹴り、右ストレーント、左ストレーントにアッパー、ハイキック、そしておれたところに上に乗り往復ビンター00連発、逆エビ固めで2人ともノックアウト。

「ごめんなさい、やりすぎちゃった」

美波たちはそそくさとさつてしまつた。

「もうホントに遅刻だよ

「わかった急ぐ!」

そして菜々たちは急いで駅に行き電車に乗った。

「なんとかそんなに遅刻しなくてすみそうね

「はあはあそうだね」

そして島駅に到着。

「たしかこの辺だとおもうけど

「あれじゃない?」

「あつた

ピーンポーン

「いらっしゃい、君たちは?」

「智?この人だよ、俺に手編みのマフラーくれたの?あれ?君は

「ああ、あの菜々ちゃんの友達で橘美波です。よろしくおねがいします」

「呼んでたんだね」

と無事に智明の家に到着した

その頃・・・

「世の中には怖い女人もいるんだな修司」
「そうだね・・・勉強になつたよ信一郎君」とよろめきながら帰る2人であつた。

第1-3話 パーティーで・・・エ (前書き)

とあることが発覚?

第13話 パーティーで・・・エ

「！」のテーブルあつちに持つていて「この料理はここにおいてつと」

「メイカちゃん？ ちょっとここ持つて？」

「ちょっと待つてよ。浜島くん」

「ねえ？ このから揚げどこにおくの？」

「ああ、それはあそ・・・」

と里奈とメイカと浜島はなにやら準備をしていくようだ。なんの準備かと言えば延期になっていた園田の誕生日パーティーである。会場が姉と兄が両方出張ということでなぜか俺の家になつたのが納得がいかないところだが・・・

俺たちは部活を早く切り上げパーティー家に向かっていた。のだが「開始時間まで後10分。いそがねえとはじまんねえぜ？ 主役なんだから」

「これが終わつてから

と俺たちはゲーセンにいた。

「よつしゃーーー！ これで10人抜き」

「いかないとまじでやばいって。この辺でやめとこいせ。これバレたら桜井になつて言われるかわかないだよ」と言うがきかない園田。

「こいつつえ～ぞ

「まじで」

「ど二ど」

「いくぞ

と人が集まつてきて収集がつかなくなつた。

「なすんだよ

「じかんがねえ～んだ。しょうがねえだろ？」

と園田を強引に引っ張つた。

「なすんだよ

「じかんがねえ～んだ。しょうがねえだろ？」

「あ～あ10人抜きだつたのに」「文句言わない」

と俺たちはゲーセンを後にした。

そして走り出した。

「やばいって確實に遅刻だ・・・」

「里奈ちゃんもう食べようよ?」

「そうだよ、先食べちゃおうよ。30分待つても帰つてこないんだよ?」

「ダメよ。まだ智明と園田くんがきてないんだから。智明はともかく主役がいないと意味が無いの。」「はい」

「わかったよ」

と言いつつ

(ちょっとぐらいなり)

(よし!里奈ちゃんよそ見して。その間に)と料理に手を伸ばす2人。

その瞬間里奈は目つきがかわり
パシッパシッ

「痛い」

「いて~」

と2人の手をたたいた。

「コラ!…つまみ食いはダメ。」「反応はやくねえ~」

「うん・・・一瞬だつたよね」

と2人はヒソヒソ話をするように小さい声で話していた。

「え?なに」

「いや別に」

「もしオリンピックに、ヨギブリ叩きつていう競技があつたら間違いなく金メダルだね」

「だね・・・」

「なに2人で話してるの？」

「なんでもないよ、なんでもない」

と3人がやつていると

「ただいま・・・ハアハア」

と俺たちは息切れしながらもなんとか家に着いた。

「やつと帰ってきた」

俺たちは居間にいった。

「ごめん。遅くなつて」

「ホント遅かつたわね。どうしたの」

「憲ちゃんがどうしてもゲーセン行くつて言い出しちょ?」

「なんでとめなかつたのよ!?!?」

とメイカがキレだした。

「とめたさ!!今日はガマンしろつて。でも聞かなくて・・・」

「力づくでも連れてくればよかつたでしょ!?!?そつか・・・そん

んな力なかつたね。体力測定も私の圧勝だつたし」

「お前が尋常じやない記録だすからだろ?」

「確かに」

「言えてる」

「うんうん」

「俺はなちゃんと人並みに運動神經も力もあんの。」

「こいつのことしてたから料理もう冷めたじやない!?!?」

「知らねーよ。お前からいってきたんだろうが」

「ケンカする前からもう冷めてたんだけど・・・」

と里奈がつぶやく。

「もとはといえまあんたが園田くんをつれまわすからでしょ?」

「ちげえよ!!--逆だよ!!--逆!-」

「その辺にしどけつて」

「メイカも落ち着いて」

と園田と里奈が止めに入つた。

そしてケンカはおさまつた。

「じゃ～はじめよっか？」

とみんなグラスを持つて

「憲ちゃん、少し遅れてるけど誕生日おめでとう、かんぱ～い！！」

「かんぱ～い」

みんなグラスをぶつける。そして料理に手を伸ばす。

俺も手を伸ばすとパシッと叩かれた。見てみるとメイカであった。

「いつなにすんだよ？」

「園田君を連れまわしたバツあんたは食べれないの」

「なんでそうなんだよ！？」

「みんなお腹すかせて待ってたんだから当然よ

「必死の思いで憲ちゃんを連れてきてこられかよ」

「なによもんくあ・・

「はいはい、わかったから

「落ち着こうね～」

と收拾がつき食べ始めた。

「やつぱ里奈ちゃんの料理がうめえよな

「うん。冷めてもいける」

といろいろ話し、食べていた。しばらくして

ピーンポーンとなり

「あれ？誰だろう？」

参加人数全部だよなと思いながら出でみると見知らぬ女の子2人がいた

「いらっしゃい！！君たちは？」

と聞く俺。すると園田がてきた。

「智？この人だよ、俺に手編みのマフラーくれたの？あれ？君は

「ああ、あの菜々ちゃんの友達で橘美波です。よろしくおねがいします」

「呼んでたんだね」

「あがつて？」

「おじやましま～す」

と入る2人。

戻つてみると俺が強引に取つた料理が無くなつていた。

「あれ！…おれのが無くなつてる…」

「当たり前でしょ？」

「なんでだよ？」

「いつたでしょ？園田君を連れまわしたあげく、30分以上遅刻して、冷えた料理を食べるハメになつたバツ」

「だからなんでそうなんだよ！…おれはひとつちかといえば被害者なんだぞ。被害者！」

「でも30分以上遅れてきたのは事実でしょ？」

「そりや…・・・そつだけど。だからって俺の料理なしつてひどいだろ…！」

「なによ？文句ある？」

「大ありだよ！！！」

「ああ、もう2人ともやめなさい」

「そこまでにしどけつて」

「やれ、もつとやれ～」

とはやし立てる浜島。そしていつものように

「お前はひつこんでる」

「浜島君はだまつて」

と2人にふつとばされる。

この光景を見て笑う菜々。そして顔を引きつかせる美波。

(え？どうなつてんの？これ)

「じめんね、来て早々こんなんで、ちょっと口づけ」

「全然氣にしてませんよ。楽しそうでいいじゃないですか（うそ・・・これが？）

「さあ祐一はほつといて食べよつか？」

とみんな座つた

「ほら菜々ちゃんはそこ」

と菜々は園田の隣に座ることになつた

「おいしいです！！！高橋先輩の料理」

「そう？ ありがとう」

と微笑む里奈

ドキッとする園田

（あれ？ 今のはなんだつたんだ？）

そしてあつという間に皿は何もなくなつた。

そしてケーキが出てきた。

「これも里奈さんがつくれたんですか？」

「ええ、 そうよ」

「おいしそう」

「そうだね」

そして電気を消してろくなにくに火をつけた。

「ハッピーバスティートゥーコーハッピーバスティートゥーコー・・・」

と園田が火を消すと同時に浜島が田を見ました。

「イテテテテ」

と頭を片手でおさえる浜島。

まもなく

「なんだこの2人の美女は？」

と浜島は2人に飛び込んでいった。

「キャー！！！」

「おい！！祐一」

「やめろって」

浜島は獲物を見つけた野獣のように2人に迫つていいく。

気がついたばかりで浜島はよくみえていない

（はあ～あのバカあいかわらずなんだから）

と美波は立ち向かった。

「美波ちゃん？ あぶないって」

肘鉄を浜島に食らわせた。そしてまた氣絶した。

「たくつ・・・かわいい子みたらいつもこうなんだから。このバカ

兄貴」

と美波はつぶやいた。

「どうしたの？ 美波ちゃん」

「ううん、なんでもない」

(祐一のやつ・・・まあこんなのもアリか。ありがとな、みんな)

第14話 テストの・・・

「ではテストを返します。机は問題用紙と赤ペンだけにしてください」

テストが終わって3日後まず国語の結果が返ってきた。

「麻生くん、阿部くん、井上くん、浦上くん・・・」

と答案用紙が返ってくる。

「やつたー」

「まじで・・・」

「こんなもんだらつ」

とテストの結果の反応も様々。

「塚瀬くん」

と俺の名前が呼ばれた。

(そうだ、これで奴隸生活から開放される!—)

答案用紙を持つて点数を見ながら席に戻つていった。

0点

(うそだろ!!そつか・・・言い争いしてたもんな。)

俺のを見たメイカは

(ばかだね)

ずっと見てくるメイカに俺は

「なによ?その点数」

「聞かないでくれ・・・」

と俺は沈んだ

そして

「桜井さん」

とメイカが呼ばれる。

「桜井さんは最高の48点!...」

「すうい!...桜井さん」

「さすが!...メイカちゃん」

とクラスの人々に褒められる。

「いや、そんな」

と照れるマイカ

「だつたんだけど名前かいてなかつたよ。それにテスト中にケンカしてたから」

「なんだよ、それ

と落胆する教室。

マイカが席に戻ると俺は

「ハハハお前も人の事言えねえじやん。まあ残念だつたな」と言つと氣に障つたらしく

「なによ、あんたのせいでしょ？」

「なんでだよ！？」

「あんたがカンニングするからでしょ！？」

「してねえよ。いつたろ？ あればお前の勘違い！」

「それに私の答案見たんならなんで・・・」

「やれ、やれ！？」

とこつものよつてばやしたてる浜島

先生はため息をつき

「ゴラゴラ！なんでいつも、いつもケンカして飽きないのかね？？」

「だつてこいつが」

と俺たちはお互いをゆびさして

「わかつた、わかつた。後で職員室ね

「なんですか」

と俺たちが抗議した。

「それはね・・・あんたたちがそつやつていちゃイチャしてるのが気に食わないのよ！？」

と隣の教室に響くぐらうい国語の先生は叫んだ

「どういう先生だよ・・・」

「ほんとの反面教師ね・・・」

「ああいう大人になりたくないね」

「うんうん」

俺たちが初めてケンカするのがバカらしくなった瞬間だった。

俺たちの国語の先生田中はルックスもスタイルも抜群なので言い寄つてくる男は必ずいるはずである。しかしなぜか誰も言い寄つてはこない。そのため、カッフルやいい感じの人たちをみるとイライラするみたいだ。

そして休み時間

「は〜」

と俺たちがため息してると

「とんだ災難だつたな」

と浜島が話しかけてきた。

「ホントだよ」

「あんなんでよく教師やつてるよね?」

「浮いた話がでてこないわけだ」

「うんうん」

と田中先生に誰も言い寄つてこない理由がわかつた気がした。

2時間目はボロボロであった数学である

「塙瀬くん」

と呼ばれる俺。

32点

(よつしゃーーーーー意外にできるーーーーーありがとう神様、仏様)

と喜んで席に戻つた。

(やるじゃない)

「やつたー。ホントに良かつた」

「何喜んでんのよ。こんな点数で」

「いいじゃねえか、思つてたより良かつたんだから」とケンカすると

「桜井さん」

と呼ばれて、返されたテストを見ながら戻ってきた。
どじりやらうじり立つてゐるよつだ。

23点

(なに!…俺が42点だと……)

と浜島は泣きながら戻つていった。

「なんだよ? その点数、だせー半分もいってねえーじゃん……せつかく祐一が教えたのに。ほら、祐一泣いてるぞ」

トイヤミを言つと

「なによ? 自分が点数良かつたからつて調子乗つてんじゃないわよ」「事実を言つたまでだろ?」

「なんですつて」

「なんだよ」

とにかくみ合つ俺たち

「ホントこりないね」

「さつきのこと忘れたのかな?」

ともう一人の学級委員の森田と木原話していた

「コラ、そこ?」

と数学の大西と注意してこつちに向かつてくる

「やめなさい、なかよくしようよ、ね? 2人とも」

「うるさい、これは2人の問題なの……」

「おやじは、ひとつこんでろ」

と俺たちが言つと

「はいい~

と大西はひるんだ

「あなたたち、いい加減にしなさい……授業のジャマでしょ? あなた学級委員でしょ? しつかりしなさいよ」

と森田がすごい見幕で立ち上がった

「すいません・・・」

と謝る俺たち

「わかればよろしい」

と「ゴッ」と笑つて去つていった

(なんだよ!!あいつ)

と俺は嫌な気分になつた。

(やつたー!!塚瀬くんとしゃべつちゃつた)

と嬉しそうな森田。しかし顔はポーカーフェイスである。

3時間目は得意な英語

「塚瀬くん」

と呼ばれテストが返される

点数を見ると48点

(くそ――――後1問だつたのに)

「桜井さん。桜井さんは満点でした。よくがんばつたわね」

(智明に教えてもらつたんだもん。当たり前ジヤン)

「やっぱすげー!!! 桜井さんつて勉強もできて、スポーツ万能で、かわいくて・・・まさにパーフェクトだな」

と俺の後ろの西田が言つてきた

確かに、胸もでかいし、運動できるし、勉強もできる。それになんといつてもかわいい。俺にはもつたいないくらいだ。性格さえ直せば・・・

「性格を直せばな」

と俺が言つと

戻ってきたメイカに

「それ、どういうことよ」

「だって事実だし」

「どこが事実よ、どこがーーー」

とテストが帰つてくるたびにケンカしてはいつも森田に怒られるのだつた。

そしてテスト返しが始まつて3日後テストは全て返された。

結果はこうだ

俺	国語	0点	ホントは	42点
	数学	32点		
	理科	36点		
	社会	44点		
計	英語	48点		
		160点		

メイカ	国語	0点	ホントは	48点
	数学	24点		
	理科	45点		
	社会	46点		
計	英語	50点		
		165点		

「結局合計どうだった?」

「165点だった」

「くそー負けた!。奴隸生活見送りかよ・・・」

と残念がると

「あーーそういうばそんな話あつたわね。忘れてた

(・・・忘れてた・・・?)

「さつそくだけジユース買つてきて?」

そうーー俺は墓穴を掘つたのであつた。

第1-5話 浜島といつこ（前書き）

浜島君についてのお話

第15話 浜島と・・・

テストの結果も戻り、夏休みをいまや遅しとまつっていた休日。それは何気ない休日であつた。

「祐一？あんた、ちゃんと部屋片付けなさい。足の踏み場もなかつたわよ」

「勝手に人の部屋に入るなつていつも言つてたんだ？」

「ちゃんと片付けなさいよ？」

「そのうちな」

「そのうちじやダメ！！」

と母親は鬼のような真顔で言った。

「わかったよ。やればいいんだろ？」

祐一は母と2人暮らし。そう母子家庭なのである。

部屋に戻った祐一は部屋を見渡す

「確かに足の踏み場ねえな・・・」

服は散乱し、どれが洗濯物かもわからない。

食べたものは置きっぱなし、カビが生えている茶碗も・・・

雑誌なども散乱、どれがゴミなのかも区別がつかない

「さてと片付けよう

と取り掛かる祐一

その頃美波は菜々と自分の部屋で遊んでいた

「ハハハハ。このマンガ面白い」

菜々はマンガを読み終え棚に戻していく。しかし

「あやつ！――！」

と「一瞬につまづき棚が倒れる

ガシャン

「アイタタタタタ」

「大丈夫？」

「うん・・・」

「全くもう菜々ちゃんたら・・・ケガない？」

「大丈夫よ。それよりこれを何とかしなきゃね」と菜々は一瞬にしてちらかつた部屋をみていった

臭いをかぐ祐一

「くさり！ これ洗濯と」

「うん、これは・・・わ〜」

それは使用済みのティッシュだつた。

この部屋には「ミニ箱はないのだろうか・・・

と整理していると一冊の大きな本を見つけた

「なんだろう」

と開けてみると小さな頃アルバムであった

どんどん片付けていく美波の部屋。すると菜々が大きなアルバムを見つけた

「なにこれ？」

と開けてみる

「わ〜かわいい！ これ、美波ちゃん？」

「うん、そうだよ。」

と質問に答える美波。

「で隣で元気にピースしてる人は？」

「あ〜これ？ ・・・お兄ちゃん」

美波はうつむいて小さな声で言った

「え？ 美波ちゃん兄弟いたんだ」

「うん実はね。でも今は別々に暮らしてるけどね。このことはあんまり言いたくないんだけど。菜々ちゃんならいいわよ」

「ちょうど今頃だったかな？ その日も今日のように夏になつたばかりの暑さだったわね」

「私たちは・・・」

と美波は話し始めた。

「うわ～美波だ。懐かしいな。今頃だったな。あれからもう10年か・・・」

俺は浜島祐一、旧姓橘祐一。

俺には、1つ下の美波という妹がいた。とてもかわいくて、俺にいつも引っ付いて離れなかつた

友達と遊ぶ時も

「また着いてきたよ」

「いいって別に、気にすんなよ。美波ちゃん、お兄ちゃんと一緒にたいもんね～」

「ね～」

と友達は美波と一緒に同意した

「お前な・・・」

「もつと優しくしろって、いいな兄妹がいて」

「俺は一人っ子だからさ」

「ねえ～美波ちゃん？お兄ちゃんのビニが好き

「う～ん・・・全部」

と笑顔で言つ。

「何聞いてんだよ？おまえ」

水泳教室に行くときも

「なら行つてきます」

「氣をつけてね」

と俺がが出ようとすると

「私も一緒に行く！！」

「ダメよ？お兄ちゃんは今から水泳教室なんだから」

「お兄ちゃんと一緒じゃなきゃヤダ！！」

と泣きじやくる美波

「ガマンしなさい！！後でまた会えるでしょ？」

「へ～お兄ちゃんのことそんなに好きだつたんだね。」

「うん、でも欠点があつて・・・」

俺は昔からかわいい女の子をみると

「ねえ、一緒に遊ぼうよ〜」

と追い回していたそのたびに

「お兄ちゃん浮気しちゃダメ!! 私がいるんだから」と美波に止められたものだ。

「・・・・つたんだから」

「あの園田先輩パーティーのときの人みたい（その人なんだけど・・・）」

そんな妹と別々に暮らすようになったのは俺が小学校に入った頃だった。

その日もこんな暑い日だった・・・

両親はいつもケンカはたえなかつたが仲はよかつた今の智明とメイ力ちゃんのようだ

「また朝帰り? たまには早く帰ってきてよ」

「つるさいな仕事だつたんだよ、仕方ないだろ」

「へ〜これが仕事?」

とポケットの中からキャバクラの名刺がでてきた

「それは・・・」

「は〜い不眠の刑」

「今から24時間寝つてはいけません」

「なんでだよ」

「というふうに。」

しかし、その関係はもうくも崩れ去つた・・・

それは突然だつた

「祐一、美波来て」

と呼び出される俺たち。

来てみると母親と父親がならんで座つていた

「いい? よく聞いてね?」

「お父さんとお母さん別々に暮らすことにしたから」といきなり言い出された俺は遠くにいた気がした。

「なんだよ、いきなり?『冗談いつてんじゃねえよ』

「冗談じやないぞ」

「ほら、これ」

と離婚届を見せる母親。

「嘘だろ? 嘘って言つてくれよ、ドッキリかなんかだろ? なあ」と俺が言つと2人はうつむいた

「それで、祐一が私と、美波はお父さんと暮らすから」

「ちょっと待つてよ。なんだよ、勝手に決めんじゃねえよーーー。」「俺たちはどうなんだよ? 俺たちは無視かよーーー。」

「そうだよ、お兄ちゃんと別々に暮らすのイヤよ」

「わかつてちようだい・・・・

と涙を流して言つた。

「わかんねえよ、わかつてたまるかよーーー! 大人の都合なんか。いいな大人なんでも好き勝手に決められて、それでいつも俺たち子供は振り回される。早く大人になりたいよ

「行くぞ、美波」

とおれは美波を連れて自分の部屋にこもつた
「私お兄ちゃんと離れ離れになっちゃつの?」

「わかんねえ~」

俺たちは混乱していた。

(何があつたのかわからんねえけど、いきなり言つて) ないだろーーー。
それはいきなりあんなこと言われて整理がつくはずもない。

6歳と5歳の子供なら尚更だ。

「私イヤだからねお兄ちゃんと離れ離れになるなんて

「俺だつてイヤだよ。でもこれは俺たちに『まどつこ』もできない」と
なんだ

俺はすごく何もできないもどかしさを感じた。

そして夏休みに入つてすぐ父親と美波がでていった。

「お兄ちゃん、今度会つたら私お嫁さん」くれる」と車から乗り出しだけぶ

「わかつた」

「絶対だよ」

「へえ～なんか美波ちゃんの別の一面が見えた」

「え? どんな?」

「美波ちゃんは「ブラン」

「ブラン」になーー！」

「あ～よく寝た。でも久しぶりにあんな夢みたな・・・」

「なんでだよ」

「だつてそうでしょ？」

と智明とメイカがいつものようにケンカしていく

「やめなつて智お前も悪いんだから」

「やめなさい、メイカが原因でしょ?」

「やれ、やれ、もつとやれー！ー！」

「お前は引っ込んでるーー！」

「浜島君はだまつて

と飛ばされる

「ちよつと倉田さん！・・・」

「また、菜々ちゃんをーーいつもやめなさいって言つてるでしょ?」

「これは私達と倉田さんの問題なんだから口をはさむまいで」

「明らかに怖がつてゐるでしょ?」

「つぬさいわねーー！」

と2人はそんな過去を微塵も見せず、今日も相変わらずの日常を送つてゐる

第16話 誕生日プレゼントを・・・

園田の誕生日のちょうど1ヶ月後は俺の誕生日である。

「そういえばもうすぐ夏休みだね」

「いつからだつけ？」

「20日に終了式だよ」

「中学最後の夏休み遊びまくるぞー！ー！」

と俺たちはいつもの5人で帰っていた

「お前、受験生だろ？少しば強しろよ」

「時期にな」

「私もぱーっと遊びたい」

そしてその夜

君が思い出になる前にもう一度笑って見せて
とメイカのケータイがなった

「はい、もしもし、あ！里奈ちゃんどうしたの？」

「あのね？週末買い物に行かない？」

「いいよ別に。とくに予定無いし。うんうんわかった地神のトラ広
場に2時ね」

「なんでだろ？まいつか」

それから週末

「お待たせ」

「私も今来たとこ」

2人は歩き始めた

「で何買うの？」

と里奈に聞くと

「水着買おう？」

「そつか。そういう時期だもんね」

と納得するメイカ。

「どこで買う？」

「やつこや、この間国体道路沿いに地神コアができただよ」
「なら、そこ行ってみよう」

と2人はその地神コアに行くことにした。

「すつごい！ひるーい」

といつまでもはしゃぐメイカ。

「はしゃがない！！えっと水着売り場は・・・5階だって」

そして2人は5階へ向かった

「す」「い！なんでもあるんだね」

「そうだね」

ただただ感心する2人。

「お客様、何をお探しでしょうか？」

「いや、まだ見てるだけなんで」

「そうですか。それなら何かございましたら、なんなりと申しつけ
ください」

「はい、わかりました」

「選ぼうか」

と2人は選び始めた

（あいつ私の水着姿なんていっててくれるかな・・・って何考えてん
のよ！・・・なんでこんな時にあいつがでてくるのよ！）

「これどう？？」

「うーん・・・ぱつとしないな。地味。メイカらしくない」

「里奈ちゃん！・・・これイケるつて！・・・里奈ちゃんにぴったり

「そうかな・・・」

と2人は水着を選んでいく

「よし！・・・これだ！！メイカいいよ」

「里奈ちゃん、やつぱりこれだよ」

と2人は水着を決め、店を出た。

「智？ もうすぐ誕生日だろ？」

「うん？ そりだっけ？」

「おいおい、自分の誕生日ぐらい覚えとけよ？」

「たく人の誕生日には敏感なんだから・・・」

「で、いつなのよ？ 塚瀬君の誕生日って」

「21日だけど？」

「お前、なにがいい？ プレゼント」

「いひつて、別に」

「おまえ、毎年、毎年遠慮すんだから。誕生日ぐらい欲しい物言え
つて」

（欲しいもの・・・？ 桜井メイカ・・・つてなんであいつなんだよ
！！ とか物じやねえし何考えてんだ。）

「別に、遠慮なんかしてないって。それに別に欲しい物ないって」

「そうやってまた茶化す」

「茶化してないって」

（そつか、もうすぐ誕生日なんだ）

その放課後里奈とメイカの2人で帰っていた

「誕生日か・・・塚瀬くん。」

「それで？ 買うのプレゼント」

「当たり前でしょ」

と語りふと

「く～」

と里奈が疑うようにメイカの全身をジロジロ見た

「勘違いしないでよ！！！ あいつが忘れるくらいの日だからかわい
そうだなって思つただけよ。ホントはイヤなんだけど・・・」

（いつものメイカね）

「欲しいのないつて言つてたけど、なんかあるかな？」

「う～ん」

と2人が考えていると

「あー靴！！」

と思い出したよにメイカは大声を上げた

「靴？」

「うん、」の間靴を欲しいなって田で見てた

「たぶん、お兄さんかお姉さんのお下がりだからよ。あと服もね。一つも自分のなんて無いんだから。智明の家つてなんだかんだで家計が苦しいのよ。だから欲しい物はずっとガマンしてきたんだと思う。」

「あいつ・・・」

こうしてプレゼントは決まった。

そして1週間後

ほんの小さな出来事に愛は傷ついてと朝早く俺のケータイがなった

「もしもし?」

「もしもし、塙瀬くん? 9時にこの間のどこね?」

と用件だけを言われすぐに切られた。

(なんだよ・・・まさか・・)

と俺はこの間のこと頭によぎつた。

「誰が行くかよ

とまた寝てしまった

ほんの小さな出来事に愛は傷ついて

とまた俺のケータイがなった

「ちょっと!! 塙瀬君、早く来なきことよ!! 何時だと想つてんの?」

と時計を見ると10時だった

「いかねえよ

「なに言つてんのよ!! これは命令よ

「お前に何言つてんだよ!!」

「とにかく絶対くるのよ!!」

結局渋々行くことになつた。

来てみるとそこには里奈もいた

「でなんだよ? また荷物持ちか

「何言つてのよ、塚瀬君がいないと始まらないんだから」

「そうよ。智明」

「ちょっと、待てよ」

と2人はそれぞれ俺の腕を掴み強引に靴屋に行つた。

「どうじつよりもだよ？」

「智明のプレゼントよ？メイカが買おうって言つて出したの」

「へ～」

「勘違いしないでよ？あんたが忘れるくらいの誕生日だからわいそつなだけよ。ホントはイヤなんだからね」

(ここつ・・・)

「あんな？お前に同情されてもこれっぽっちも嬉しくねえの」

俺はそう言いながらもとても嬉しかった

「すいません、今最後の1つが売れてしまいまして」

「そうですか」

と店を出る

「なんで、売り切れるのよ！…」

「まあ仕方ねえよ。限定品だから。たぶん今はどこも売つてねえと思つ」

「どうしてくれんのよ？」この時間無駄だつたじゃない

「知らねえよ。そんなこと…お前が勝手にこの店に入れたんだ
わうが！…」

「本はと言えばあんたが欲しそうに見るからいけないんでしょ？」

「なんでもうなるんだよ！…」

「ちょっと2人とも？外でやめてよ。しかも大声で周りの迷惑でし
よ？」

と言つが里奈の声は全く聞こえない。だんだんイラついた里奈は
「いい加減にしなさい！…！」とがどこだとおもつてゐの～！

！…」

と一番大きい声で叫んだ。そしてケンカは収まった

「里奈が一番ここがどこかわかつてないよな？」

「やうやう、この間も・・・」

「まじで！――！」

と小さな声で話しながら次の靴屋に向かつた

「うーん、これは派手すぎる」

「ねえ？これどう？」

みんなにみせるメイカ。

「それカッコイイじゃん」

「確かにカッコイイけど、智明にはあわないわね」

「そつか

としょげるメイカ

「イヤなわりには真剣じゃない。やっぱ相手が智明だから？」
「なんでそうなるのよ！――！選ぶからにはちゃんと選びたいだけよ。
勘違いしないでくれる？」

「へ～園田くんにはUチップスのサッカー選手のカードだったたくせ
に？だれだつたつけ？レンサクレス。イングランド代表の
「仕方なかつたのよ！――あの時お金が無かつたんだから」
「そうですか」

(メイカらしいわね?)

「ならこれは？」

「いいじゃんこれ！――決定ね」

こうして俺のプレゼントは決まった。

(誕生日プレゼントなんて何年ぶりだろ?)

「里奈、桜井ありがとな。大事にするよ」

「どういたしまして」

と2人同時にいう。

(今度は服を選んであげよ!)
と思つメイカであった。

第17話 終電を・・・

あの買い物から数日後俺は15歳の誕生日を迎えた。そして中学最後の夏休みが始まった。そんなある日のことだった。

「やつたーーー待ちに待つた夏休みーーー何して遊ぼうかな」と受験生とは思えない発言をする浜島

「たく祐一は気楽だな?」

と俺

「そりか?」

と浜島は不思議そうに聞く。

「そうだよ

と里奈は呆れる。

「これから受験まつしひらつてーの」と俺も呆れていた。

「俺にはもう関係ないもんね」とわけのわからないことを言い出した浜島

「どういふことだよ?」

と聞く俺。

「そりか!もう決まつたんだろ?確か」

園田は思い出したようにいった。

「うん。花川つてどー」「

と浜島は答える。

「あーそこ確かテニス強いよな」

園田「いや、あそこはスポーツ全般強い。野球部は5年連続春も夏も甲子園でてて、水泳部もインターハイ3年連続優勝者だしてるし、サッカーも6年連続国立行つてるし、テニス部に至つては10年間ずっとシングルズ、ダブルスともにベスト8独占状態、しかも団体12連覇中。まさに化物つて人ばかりいるんだよ。あそこは

「すげーじゃん……祐一

その夜

ほんの小さな出来事に愛は傷ついて

「もしもし?あー里奈どうした?」

「明日、みんなで遊ぶことになつたんだけど」

「それで?集合場所は?」

「いつもの白多駅の鈴のとこで一時ね

「わかった」

そして翌日

「だれも来てねえ見たい」

時計は12時55分だった

(珍しいな、この誰もいない)

するとうすぐにマイカがやつってきた

「あれ?みんなは?」

「まだ来てねえ見たいだけ?」

「ならじばりく待つといひ

「ああ

しかし1時をすぎ、15分経つても、20分経つてもみんなは来ない仕方ないので

1人1人に電話した。

「はい、もしもし。うん?智明?どうした?はあ~あ

「もしかして寝起きか?」

「ああ、今起きた」

「おまえな~何時だと思つてんだ?さつさと来い!~!

「はつ?何の話だよ?」

「里奈から聞いてんだろう?」

「だから何の話?」

「今日の遊ぶつて話」

「聞いてないよ。そんなこと……それに今日無理だし

「そつか、わかった。」

「すまんな」

「いって別に。それじゃーね」

電話をきつた

「なんだって？」

「なんか、聞いてなかつたつて。あと今日は無理だと」

「そう」

その後も

「・・・って話なんだけど?」

「へへ俺もナンも聞いてなごめんホッホッわかつた今から行くへん
ホッゴホッゴホーーー！」

「無理言つなーーおとなしく寝てるーーー」

そして肝心の里奈と語つと

「ホントゴメンーー父方のおばさんが昨日亡くなっちゃつてお通夜
に行かないといけないのホントゴメンね」

「いいよ。仕方ないだろ。うん。うん。わかった」

「里奈も無理みたい・・・」

「もしかして2人きり?」

「そう・・・なるな」

俺は急にドキドキしてきた

(なんでドキドキしてんだらうへ意識してるへ)

(なんでこいつと2人きりなのよ?)

と突然メイカは自分の部屋でのことを思つ出した
お互に顔が赤くなつていた

「なに、顔赤くなつてんだよ?」

と聞くと

「別に赤くないわよーーそひちーそ何赤くなつてんのよ」

「俺だつて別に」

「私、帰る。あんたと一緒にじゃ楽しめるものも楽しめないわ。それ
にこの間みたといきなり倒れられても困るし」

「これは、じつちのセリフだーーおまえとなんかと。ついひとでじ

やーな。氣をつけて帰るんだぞ」と帰ろうとする

「待ちなさいよーーなにホントに帰ろうとしたのよーーせつかく2人だけだけ集まつたんだから、少しあは付き合にならこよーー!」「なんだよ、それ。」

「行くわよ?」

「ちょっとどじー」「くんだよー!?」

「行きたいとこがあるのよ」

と俺は強引にメイカから手を引かれた

「で?ボウリング?」

「そうよ悪い?」

「別にいいけど。」

「勝負よーー勝負」

「へいへい」

「塚瀬君が勝てばいままでやつてたことをなしにしてあげる。要するに私の言いなりから解放してあげる」

「本當か?」

「ええ女に一言はない!!」

とボウリング勝負になつたのだが・・・

5フレームまでいき

「おし!スペアだ」

と好調な俺に対し

「おりやーーー!」

と投げるもガーターが続くメイカ

「ハハハ、これで6連続ガーター?ホントにやる気あんのか?」

と挑発する俺

(なによーー自分ができるからって!悔しいー負けたくないあんなやつだけには)

と挑発に乗るメイカもメイカである。

そして1ゲームが終わつた。

「やつたー100超えた」

そして俺はメイカをみて

「16？ありえねえ！…どうしたらこんなスコアになるんだ？」

「仕方ないでしょ？ボウリング苦手なんだから」

「こんなスコアじゃ勝負に勝つてもちつとも嬉しくねえよ…」の

勝負はなしな

「ふうん。そんなに私にこき使われたいんだ？」

「そんなんじゃねえよ…」これじゃいじめてるみたいでいやだつ

つてんの。

「変にやさしくしないでよ、気持ち悪い」

「なんだと…！」

「なによ…！」

「しつかし意外だな）。桜井にも苦手なスポーツあつたなんて。な

んなら俺が教えてやるよ。」

「絶対イヤだ…！あんたに教えてもらつぐらになら死んだ方がましよ。」

「別にいいんだぜ？それでも。ボーリングの後ホラー映画でも見に行こうかな…どうしようかな…？」

「わかったわよ。そこまで言うんだつたら教わつてあげてもいいわよ？」

とメイカは教わるためにボールを持つ。

「あれ？お前左利きだつたか？」

「あ、うん。こいつ時は左のほうが投げやすいんだ。」

「へへ」

「まずこいつして」

と言つて俺はメイカの体に密着し両手を掴んだ

（あの甘い匂い。つて俺何考えてんだよ？バカ…！）

「ちょっと。私に引っ付かないでよ…！」

「し、仕方ネエ～だらう！！教えるんだから」

お互い顔が真っ赤になりしばらくこちない雰囲気が流れた。

それから俺は左といつことで苦戦しながらもメイカにいろいろとレクチャーした。

その甲斐あってかメイカは見る見る上達していった。

終わる頃にはストライクを連発で全く歯が立たなくなっていた。

俺の教え方も良かつたのだろうが、やはり、メイカの身体能力の高さには改めて驚かされた。

その後カラオケに行き珍しくお互いの歌声を褒めあい顔が赤くなり、ゲーセンに行き人気の格闘ゲームでメイカと対戦してメイカは俺が勝つたびにムキになりどんどんお金を費やしていった。

気づくとあたりは真っ暗になつていて街灯が灯つていた。

「やべ～もう11時30分だ。電車大丈夫かな？」

「とりあえず走ろっ？」

「おう」

俺たちはひたすら走った。しかし・・・

「ただいま23時43分の野口行きの電車は全てなくなりました。

明日の・・・」

終電を逃してしまった

(どうしよう・・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1687d/>

TM～休載中～

2010年10月9日03時23分発行